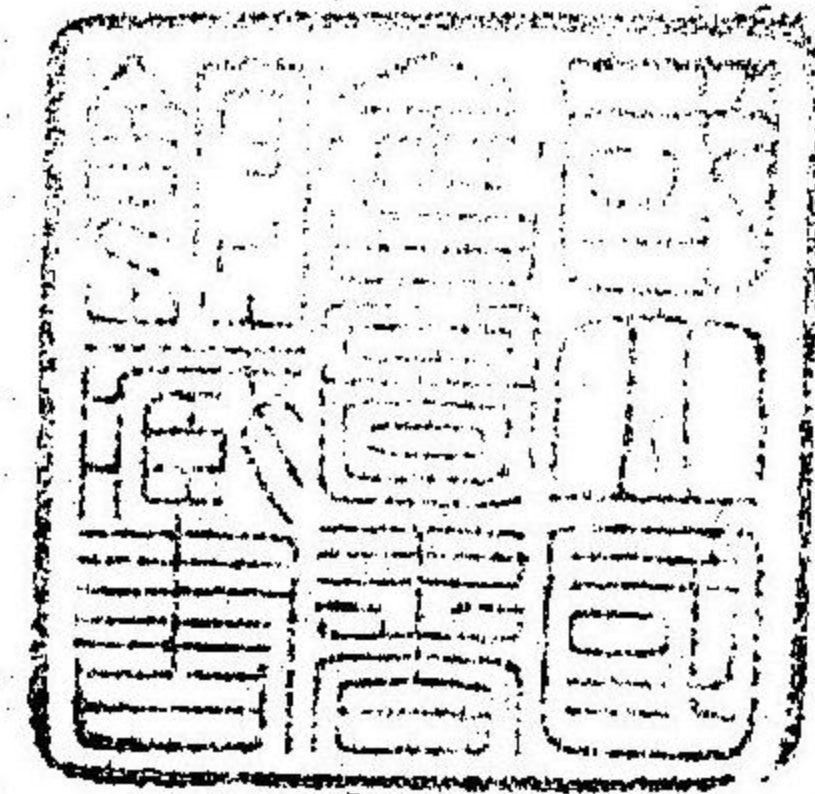


W245
20

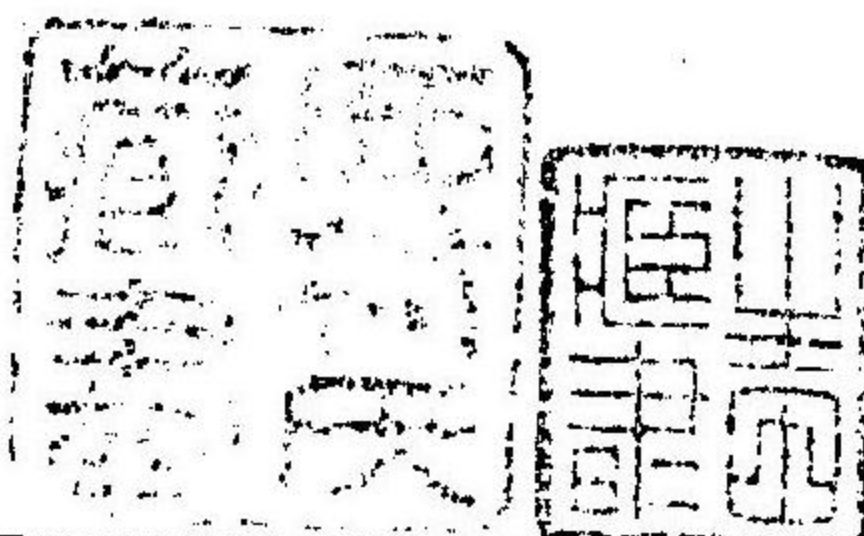
江戸名所圖會

六



西村妙子殿

56.10.-5
81W51779



本救十二天宮 本救の塙よありと真言宗多聞院別當奉祀

も祭神ハ十二天神并ハ海上出現と云む佳景の地なり神

奈川の臺より眺望せむ所の絶壁ハもあらし此社の右に

裏手ハ聳立せむ所の巨巖 此の巖頭数株の松梅

鬱蒼とせむ采茂せむと 本救の地ハ川原北条家の分限は左邊に

五十貫文と 大領を由えむ此地ゆへ百貫文同橋本

吾妻明神社 同所六町斗南の方原宿といふあり 相傳ふ

天和年間此地の獵人吉太夫といふもの此海上に網を投

し當社の神幹を得しと 水像ハ鬚鬚と云 依り小祠を

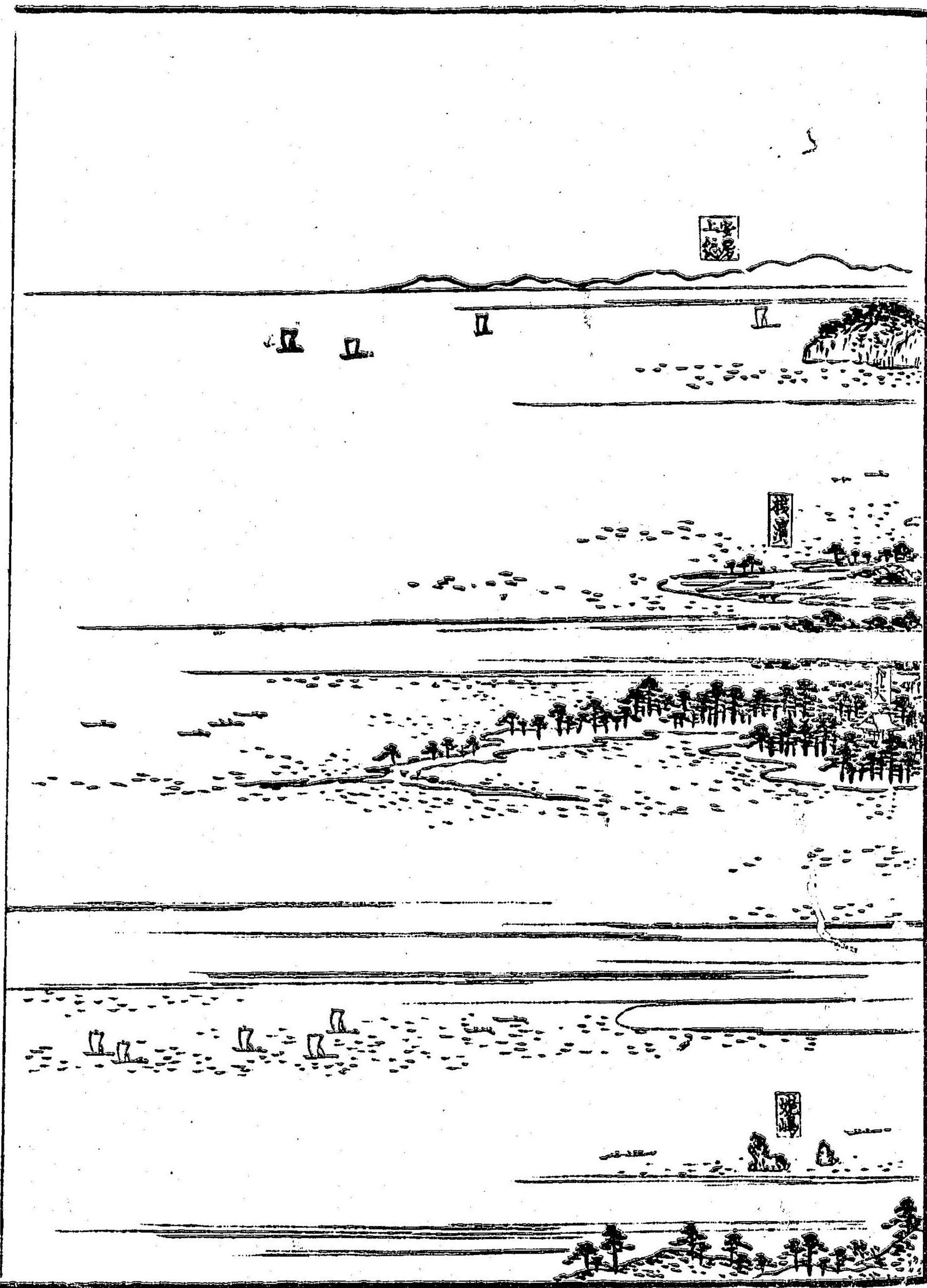
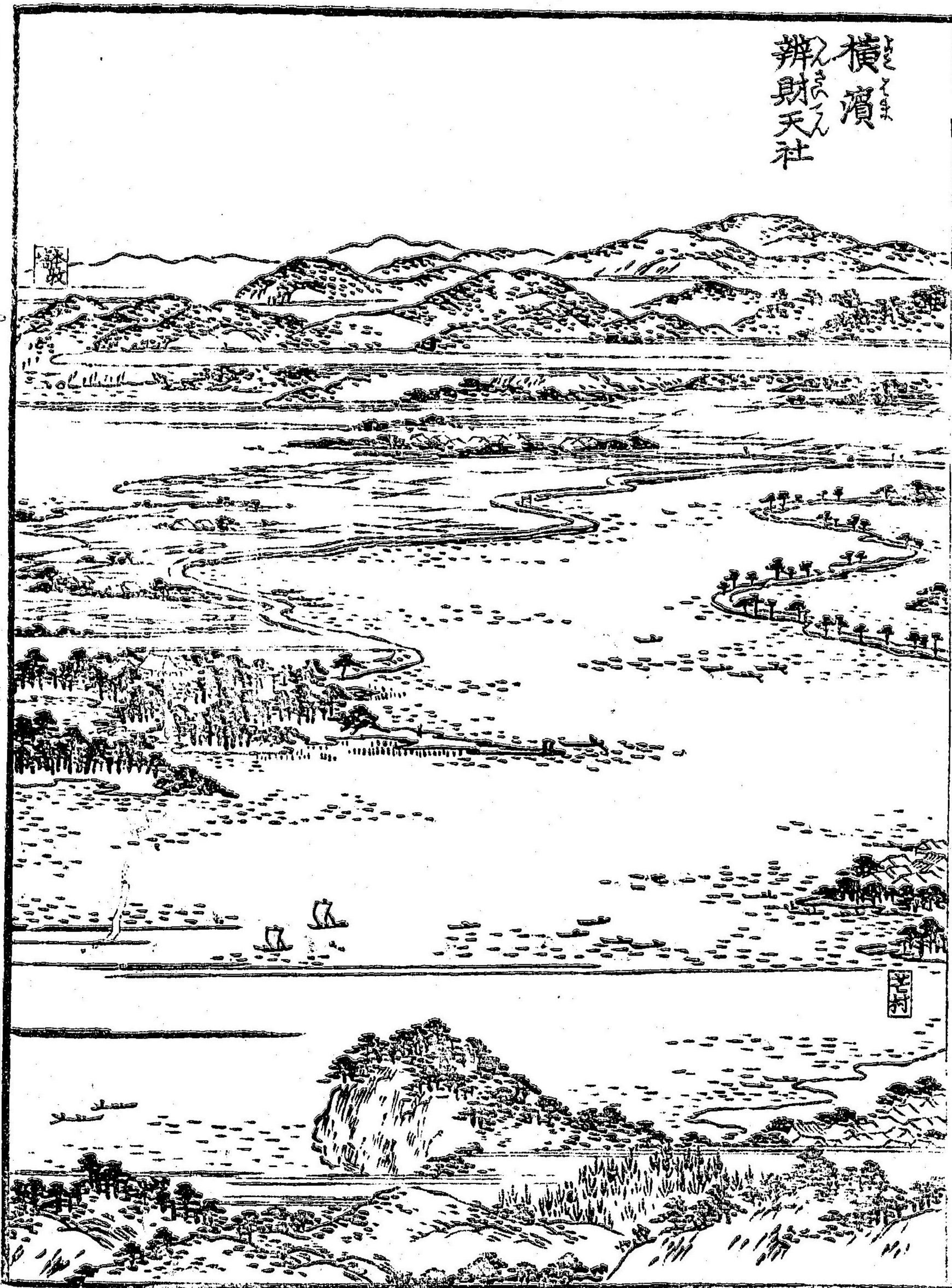
學建せむ云此神幹ハも南總水更津吾妻明神の神

像ゆへ浪よ漂ひ此地よ止るもやう祭神ハ八皇十一代

垂仁天皇の皇子日本武尊初の御名よは小碓命と奉る

武藏相模の際と尊の東征御經過の地とて以て所々

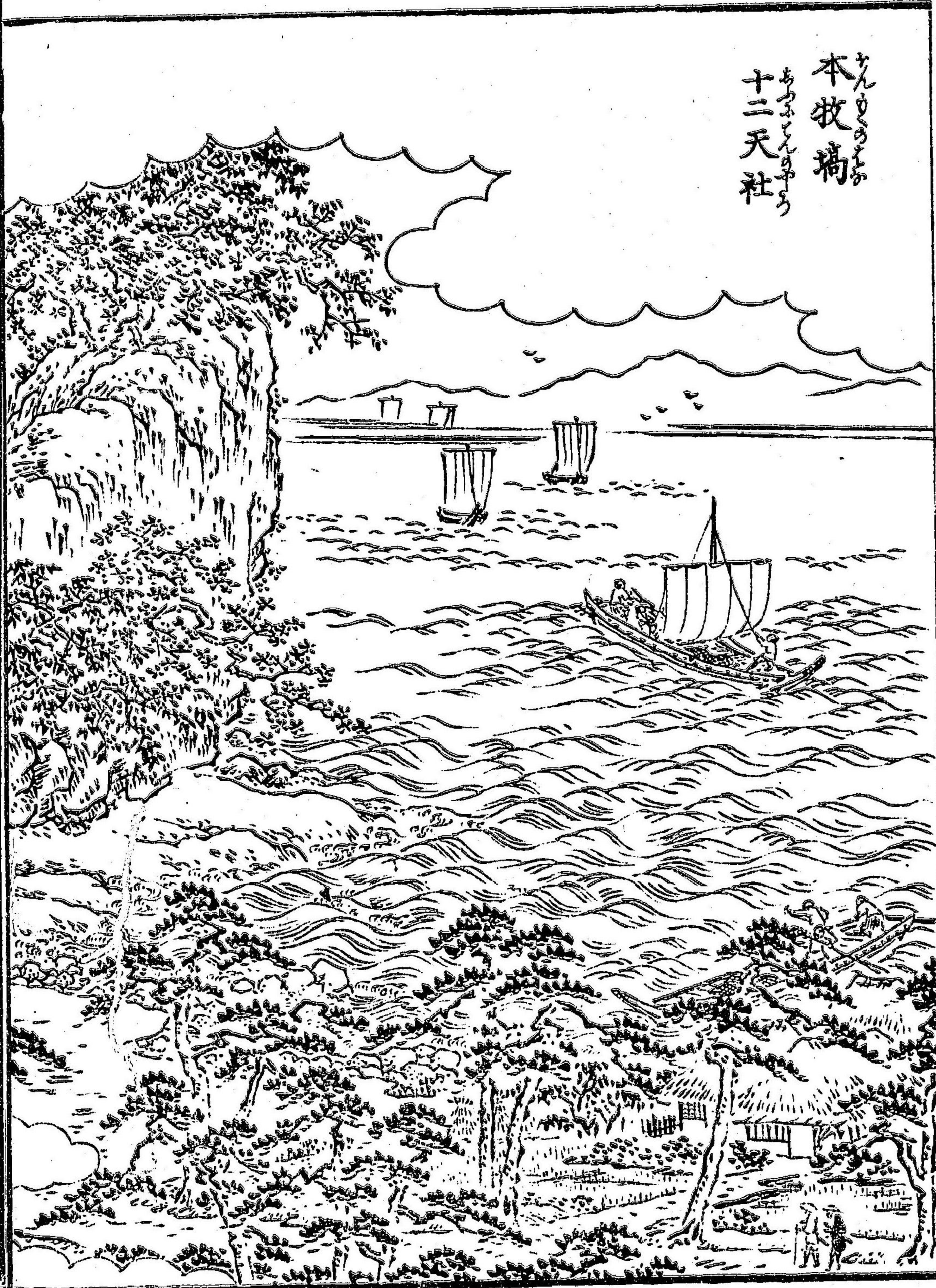
横濱
辨財天社



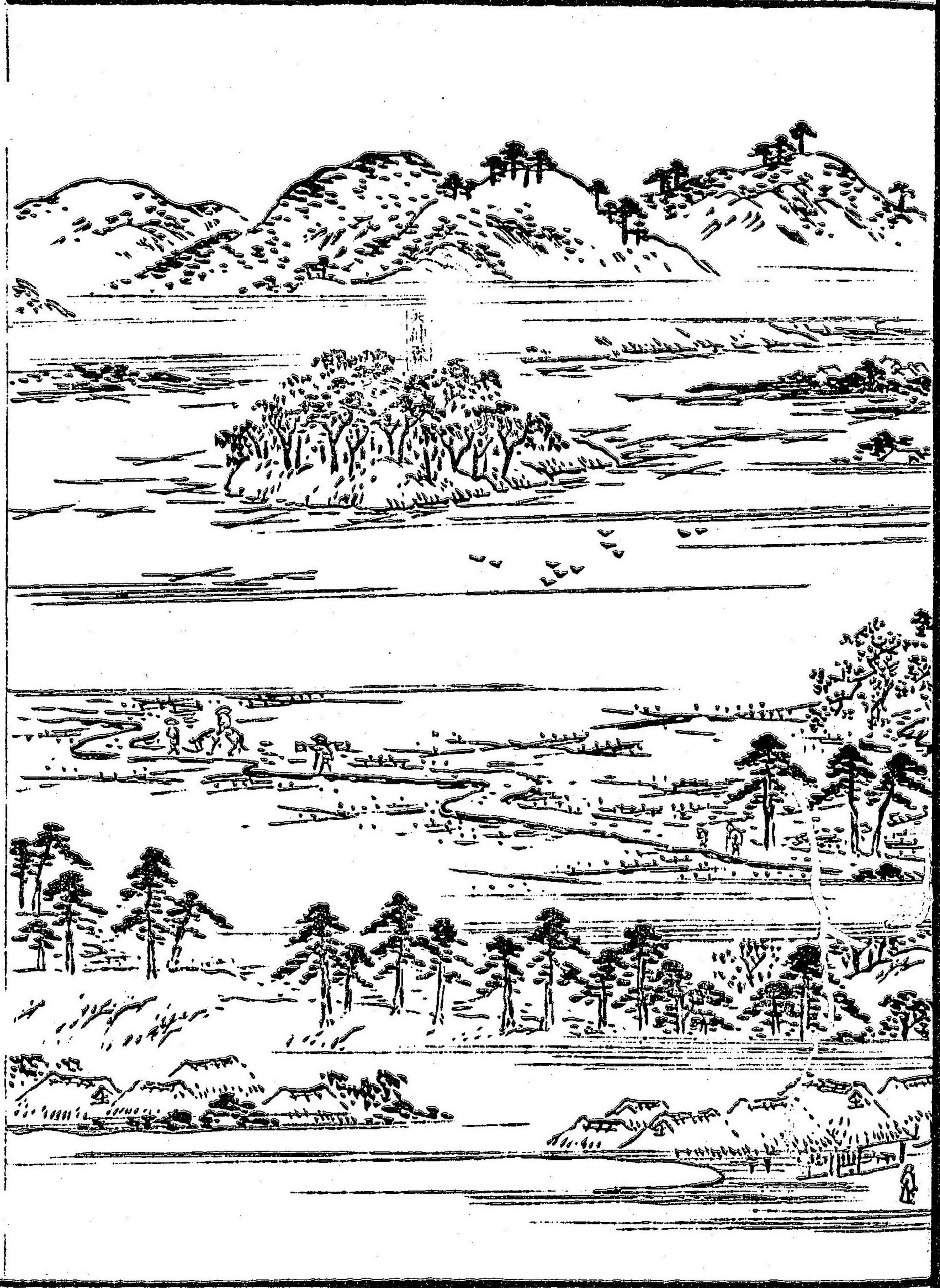
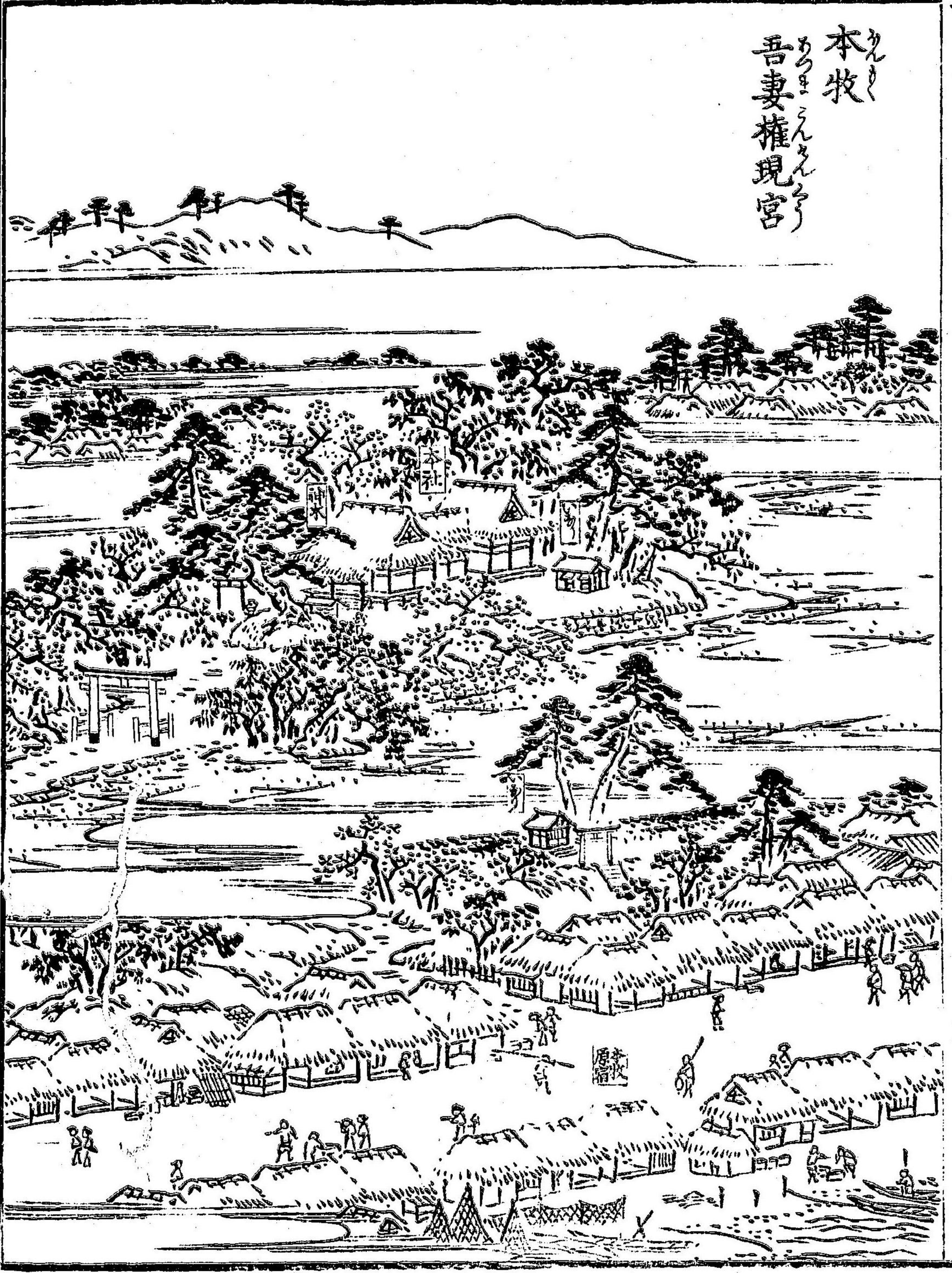
ツツジ
芒村
死島
此地ありし
海苔を産
き川増
らすと云



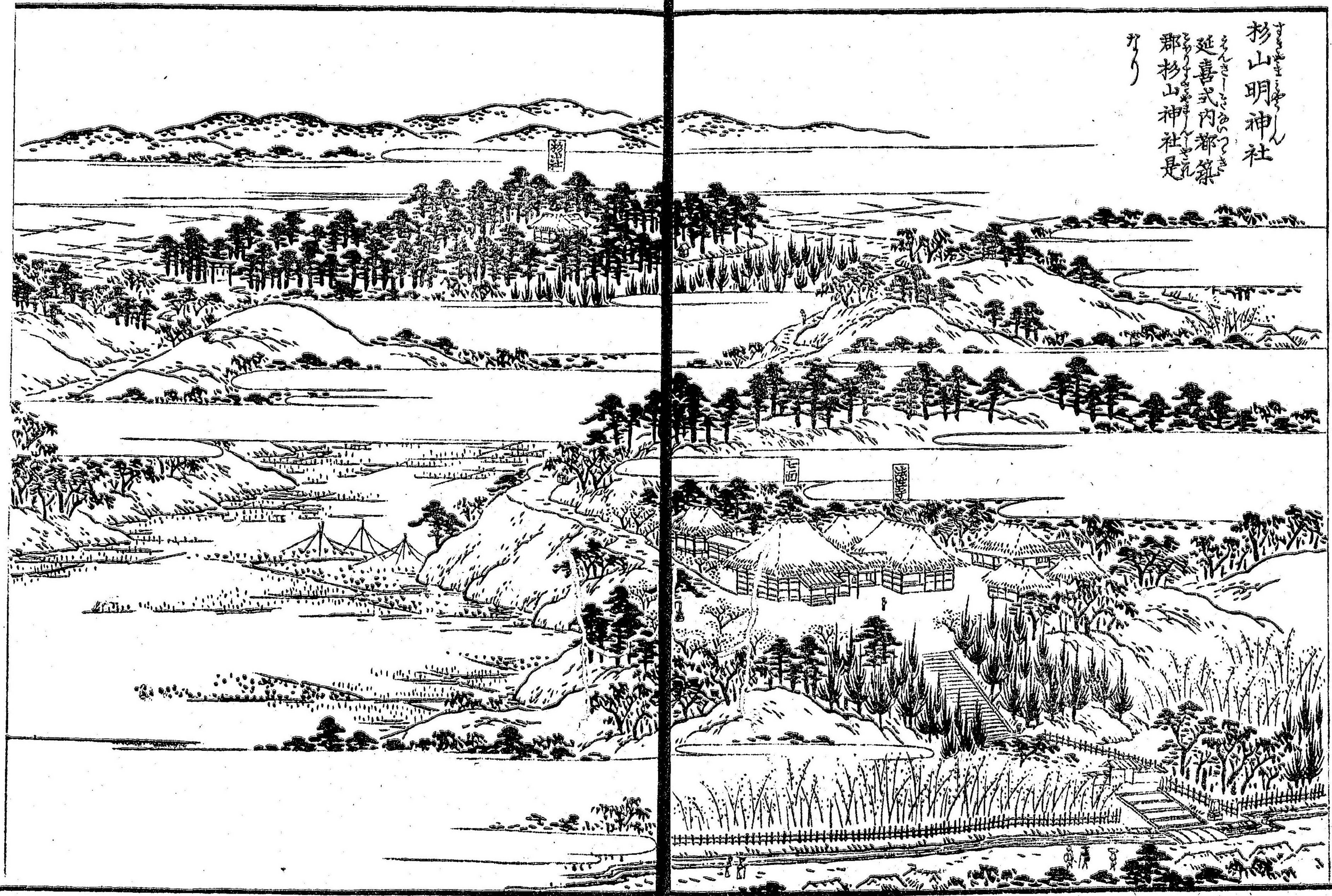
せんりゅうのまが
本牧場
あつせんやう
十二天社



本牧
吾妻権現宮



杉山明神社
延喜式内郡築
郡杉山神社是
なり



新編寛永五年齊藤徳元の関東下向記一所の入り此里の若のりれと
尋ねし海辺のありあり浦のありありなるを記しかく若のりれと
答へし記せり

平安紀行 かこゆくと若つる所ゆく

日ゆりゆりかこゆくと若つる所ゆく 持資

田園雜記 うひの宿とつるあり

つれなきうひの宿とつるあり 道典 准后

鎌倉記行

かこの里のありありなるを記し

地白ある所のありありなるを記し 澤庵

帷子川 下帷子の南新町驛舎の入口と流る 川幅十五間此流

小架を投橋と帷子橋と号く此川ハ同國都築郡白根の

辺より流く此地小至る下流ハ久良岐郡戸部村茂経く

海小會也

程谷新町 東海道官驛の一なり 帷子町上下塔間町上下神戸町
上下塔の地と合せし驛とせし

或ハ慶長或ハ慶安又ハ万治年間ともこの説一かすす此家の有限帳
三郎と云人の所領小社の所主谷とあり此地を昔ハ小社ハ角一とあり

神奈川より此地迄約程二里九町あり 驛亭軒と連絡繋

昌の地より

神戸川 神戸と上帷子との間の川ゆき長二間と云は此板

橋を架ししなり 神戸橋と号く是ハ 水源ハ田間の水落集りて流

きとせし新町より右の裏と流き此地小至る末ハ神戸岩

間の左の裏を回りて帷子川入

大神宮 神戸の地小あり 街道の右側ハ鳥居を建た大門

三丁ありしを入る社あり 神主岡田氏奉祀を祭礼ハ六月

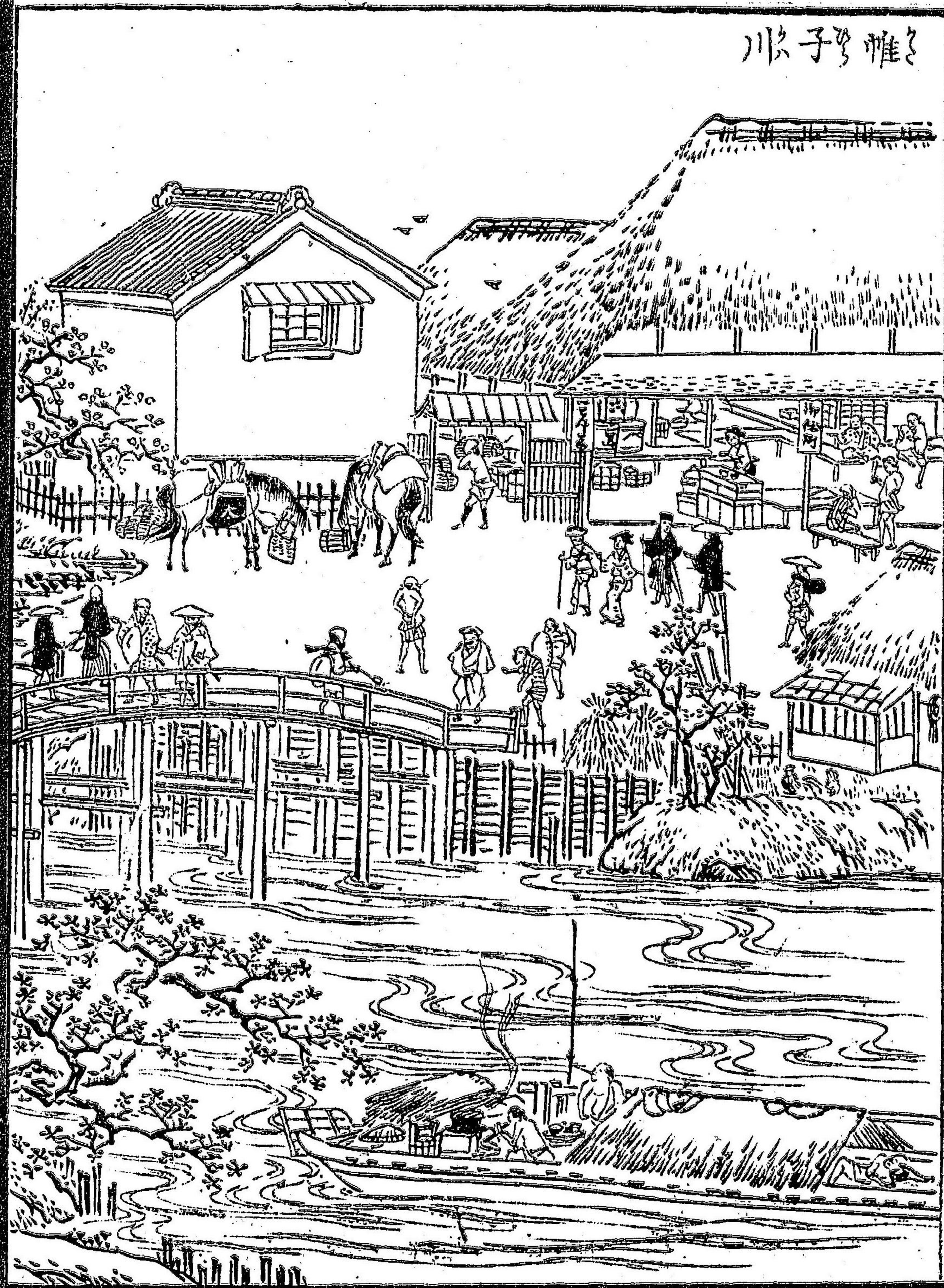
九月兩月の十六日中より九月と大祭の辰とを相傳ふ往古

當社の御神武州御厨庄榛谷峯ハ影向なるありしと

後世川井二股川程々谷宮林同所ハ坂等の地へ迂し

まゆりせしりし神託あるを以終ハ嘉祿二年九月十六日

惟子川



此是武藏惟子郵
 別家十日經十州
 只思父母不姑舍
 夜々夢魂鄉里遊
 陶齋



惟子里
神戶村
神明宮

平安記行

かきく

あき

日盛々

かきく

あき

旅人の

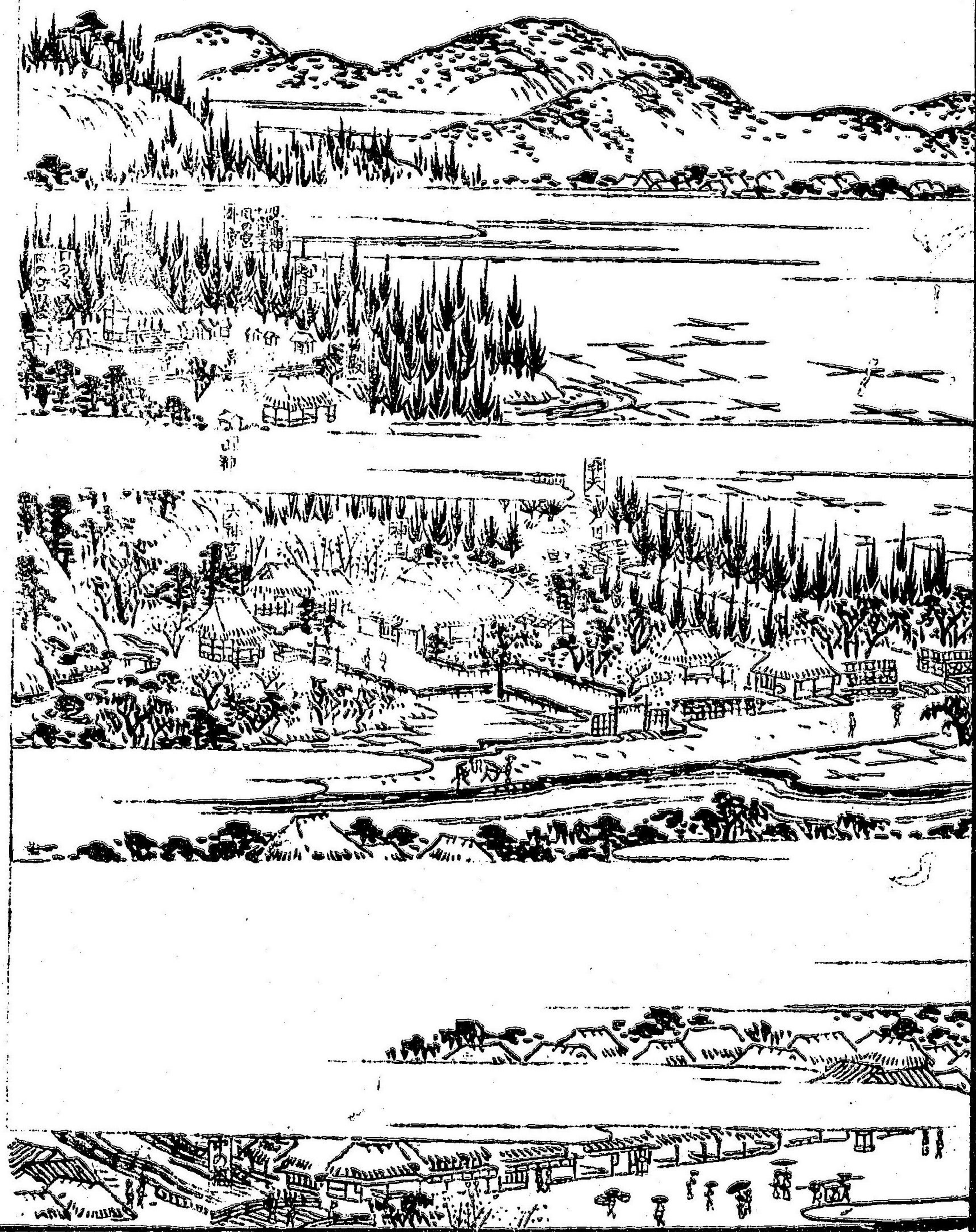
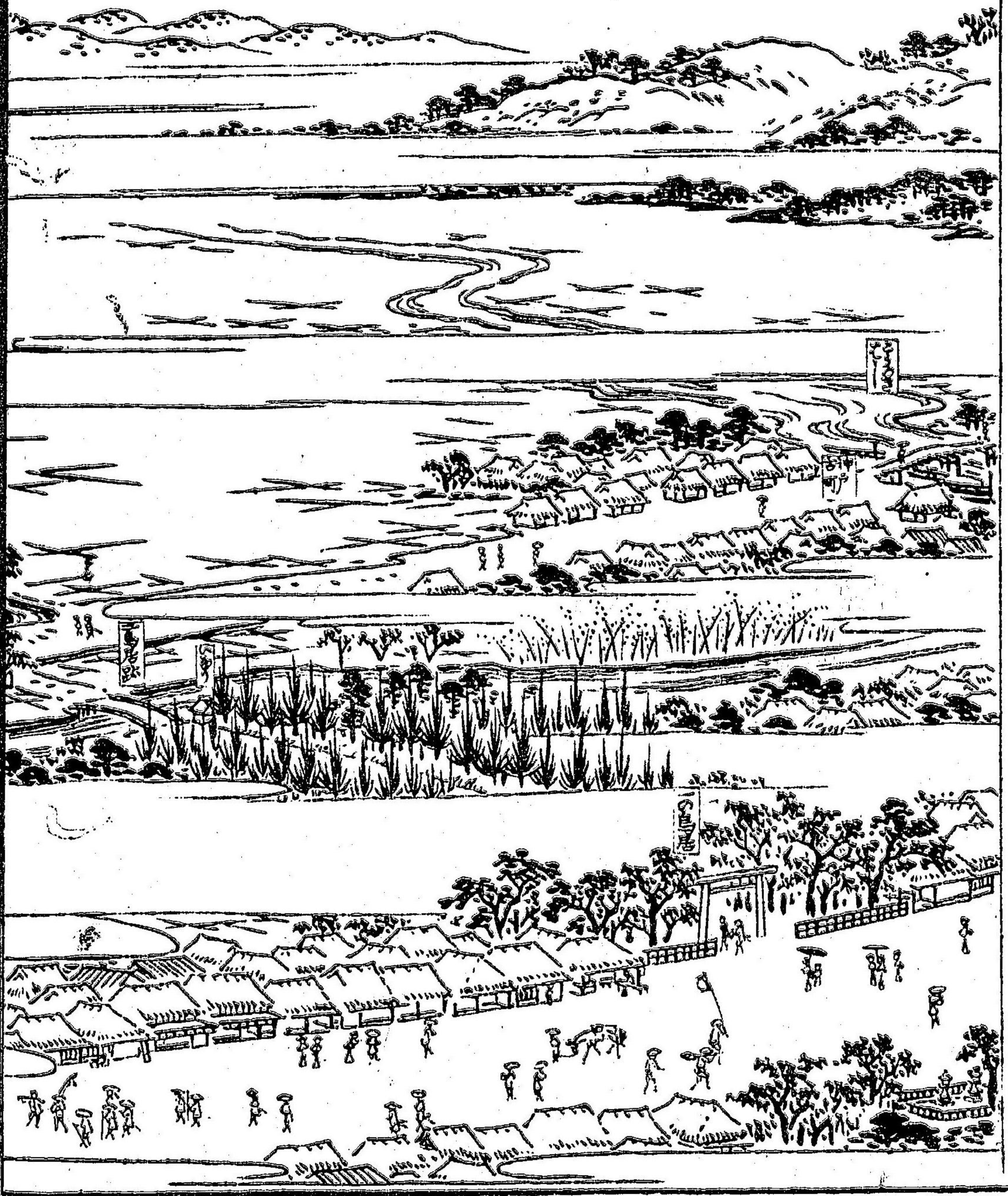
汗あふ

かきく

あき

の里

持資



境水
 主人の称なり
 武蔵相模の
 境あり故に
 傍尔の
 杭と建
 らる故に
 此名あり



あまのさか
科濃坂
権太坂
とも云



此山上より迂一せしむ又元和二年三月三日今のやく平地へ
宮居と造立せしと云 見目河神田春日天神町等の地より

古町街道 芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程谷の
元町へゆる通路中より行程十八町よりあり則古の街道

なり万治二年 或ハ慶長或ハ 今のやく通路を改られしより裏
通より古町街道と稱し今の驛舎を新町と名しなり

帷子橋造替の路ハ此古町
街道と往還の通路と也
界木 立場中より道より右より武蔵相模の國界の傍尔城
建よりある此称あり此地牡丹餅を名産とせ是を製する店

両三家あり
品野坂 或ハ信濃又
科野は作 俗に権太坂と稱し此地ハ武相の國界あり

坂路の兩傍中より倉松の老樹左右より森列しと坂上より
右と望めハ其麓の白峯玉をけりしとゆく左を顧むと

鎌倉の遠山 或ハ信濃
或ハ武相 濃中より実より此地の風光まき一奇觀
と稱す春日山日記に謙信鎌倉鶴岡社恭乃節

江田稻毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋あり
この岩を討敗とありハ此地少と中世小墨あり

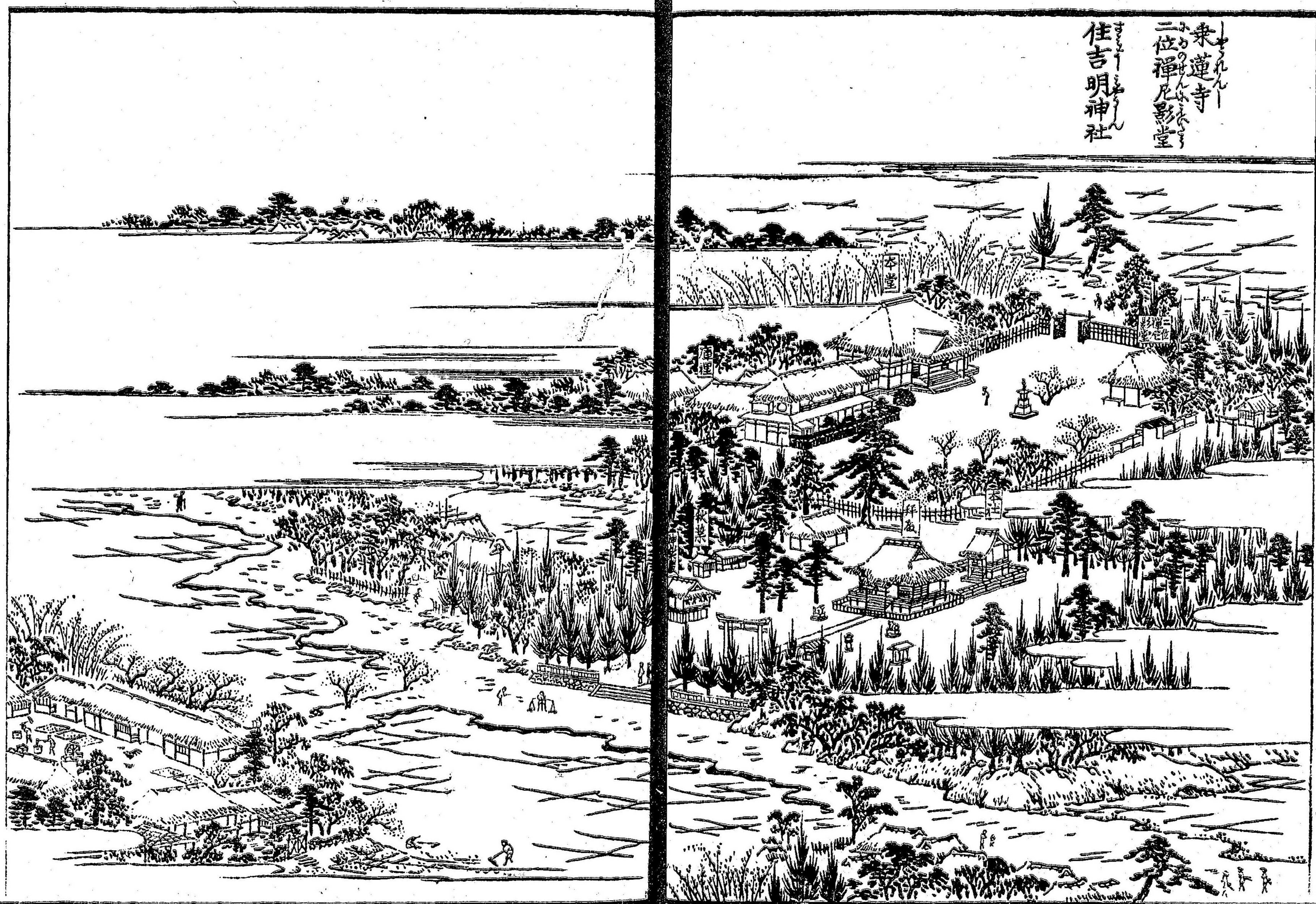
時田城跡 新町より金澤通道時田村の内時田橋と
ゆる東南の方五町計と隔て道より左より土入ハ

城山と号く封城東南ハ一町計南北ハ二町餘あり
小丘なり 此地ハ久良岐
郡に属せり 往古吉良左兵衛佐義門此地に住す

と云 小田原記ハ永祿十年武田信玄小田原を襲んとす
の勅武田源六入道道遠軒と四郎勝頼発向あり 条下ハ王子筋へ信玄

神大寺の山と藤
左兵衛佐居住なり 左兵衛佐其頭大橋守康忠北見關加賀守藤頼相
具し小田原より此吉良ハ北条氏康の妹婿中興の居住しあり折前
人敷もあれはと多目周防守とす其頃青木といふは藤田はあり折前
此敷の宅と焼せしと生くゆりあり今ハ輕部豊前守泰則より藤田より
折云同心とを連れて時田と守護し

乗蓮寺
二位禪尼影堂
住吉明神社



寛永十癸酉年三月十一日

大檀那間宮産次郎忠次
別當 兼蓮寺 秀譽

東鑑脱漏曰嘉祿元年乙酉七月十一日庚午丑刻
二位家薨御六十九歳是前右大将軍之後室二代
将軍女儀也前漢之呂后而令執行天下給若又
神功皇后令再生令擁護我國皇基給敷云云
十二月辛未霽寅刻二位家御事有披露出家男女
濟之云云

按二當寺梁札の銘は二位禪尼逝去の日と嘉祿元年七月十三日とを
東鑑脱漏七月十一日とすとの程とすべし

瑞應山弘明寺 金澤通道より十四丁歩右の方へ入る弘明

寺村あり坂東順礼札所の第十四番目なり當寺は
弘法大師開創の佛刹なり中興を光慧阿闍梨と号
古義真言宗石川室生寺に属せり毎年七月十日十二月
十八日市立く大賑はす

東鑑曰治承五年正月廿三日於武藏國長尾寺
并求明寺等者以僧長榮可致沙汰之旨被定下是

源家累代祈願所也云云

本堂本尊十一面觀世音菩薩 初基大士一乃三禮中にて彫造ありと云
佛龕背面銘曰 中興光慧阿闍梨注さるるなり

荒木作表本有横削横度十方立像堅救三世長六
尺約六丈十一面頭果地各行基示深旨也

天満宮 本堂の内右の取壇はあを昔浪華の株客其菅神の像一軀と
携へ來り置と云く我有儀の價と求むらんを世室と云す其喜躍
しと云く神像と置と云く其の門方敷善氏其來當寺の鎮守と崇め
神と稱す神の手の入りく大は感應をゆくと因く神恩を謝す云々
神殿造營せしなり

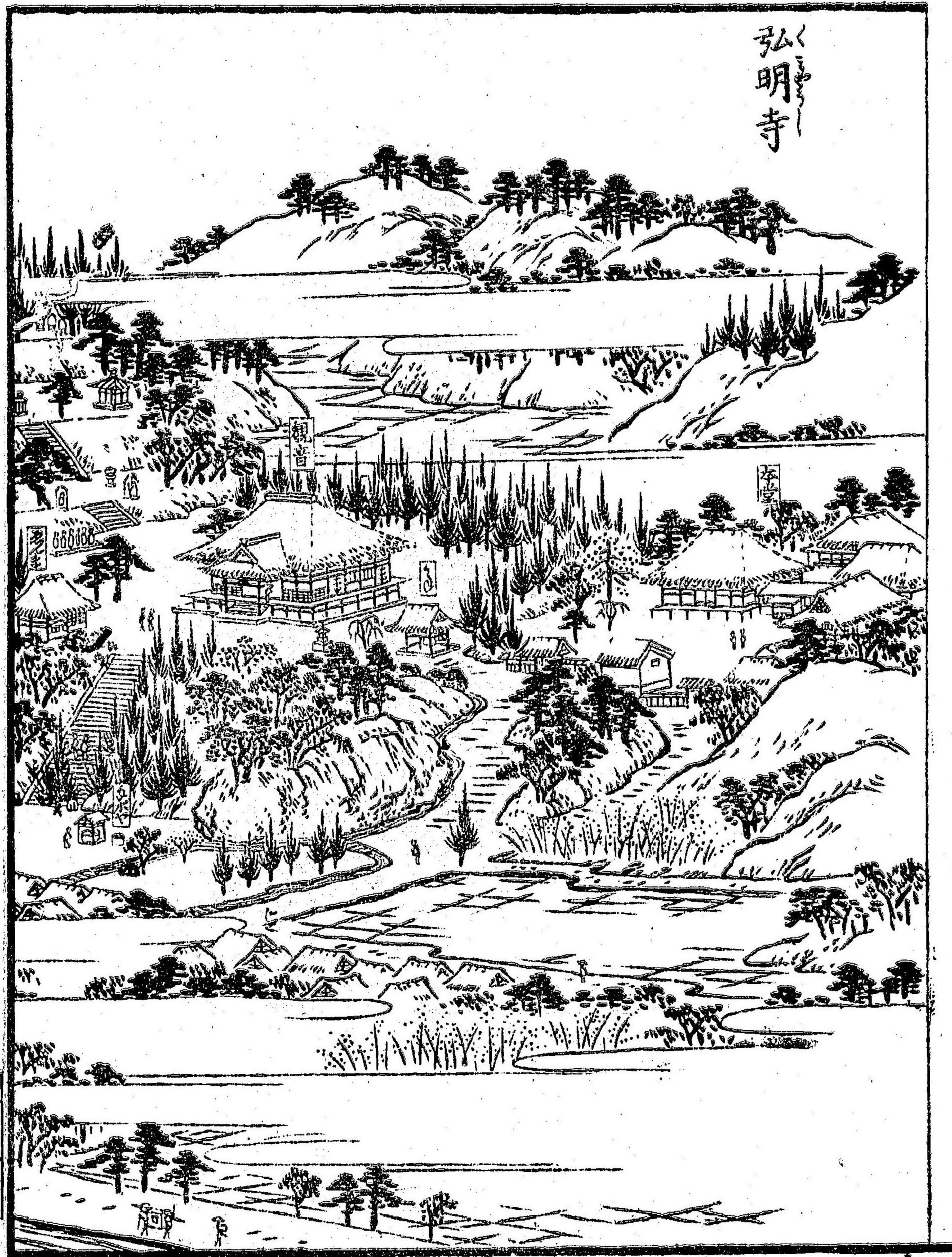
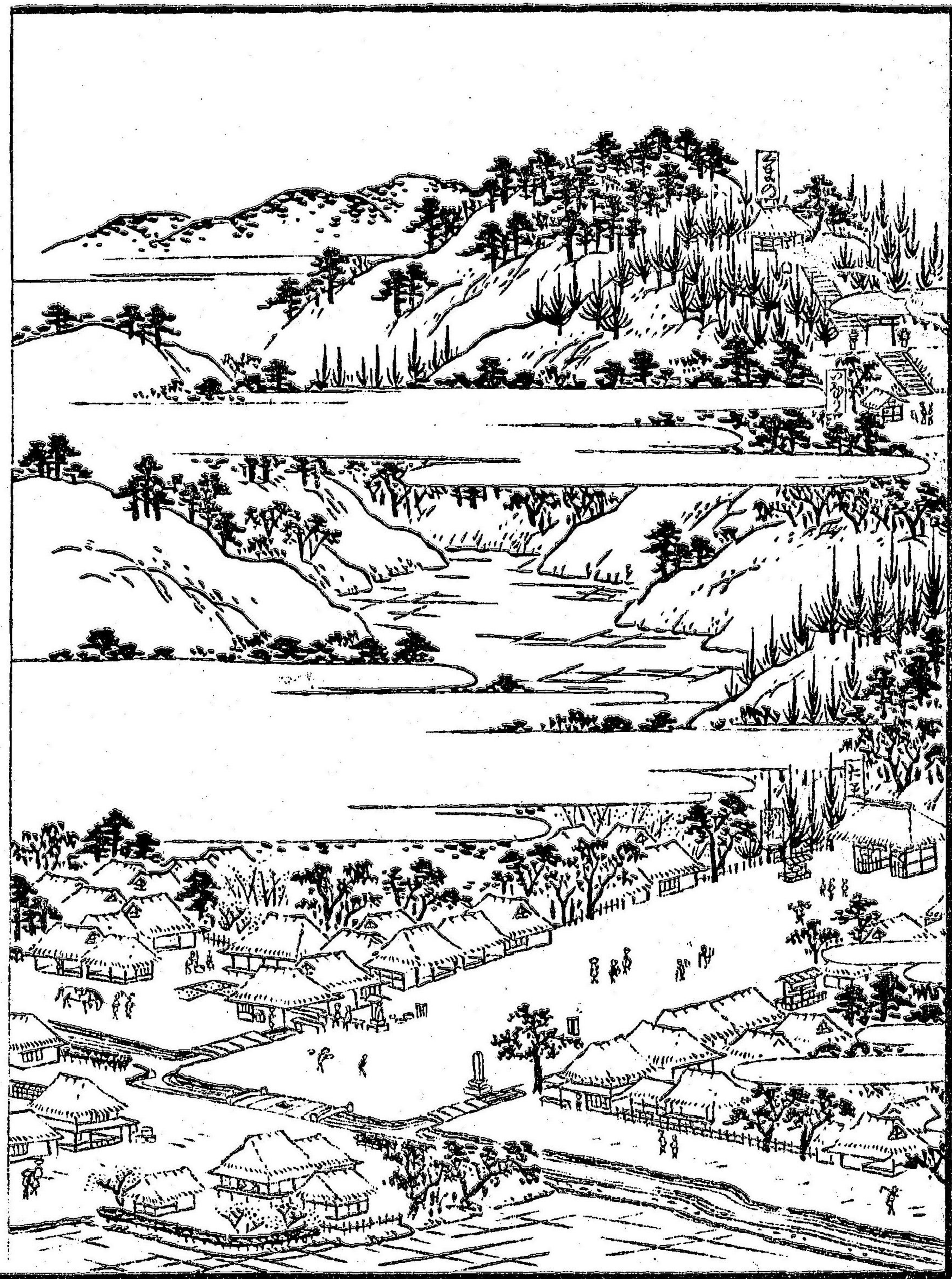
本堂の向拜と掲る



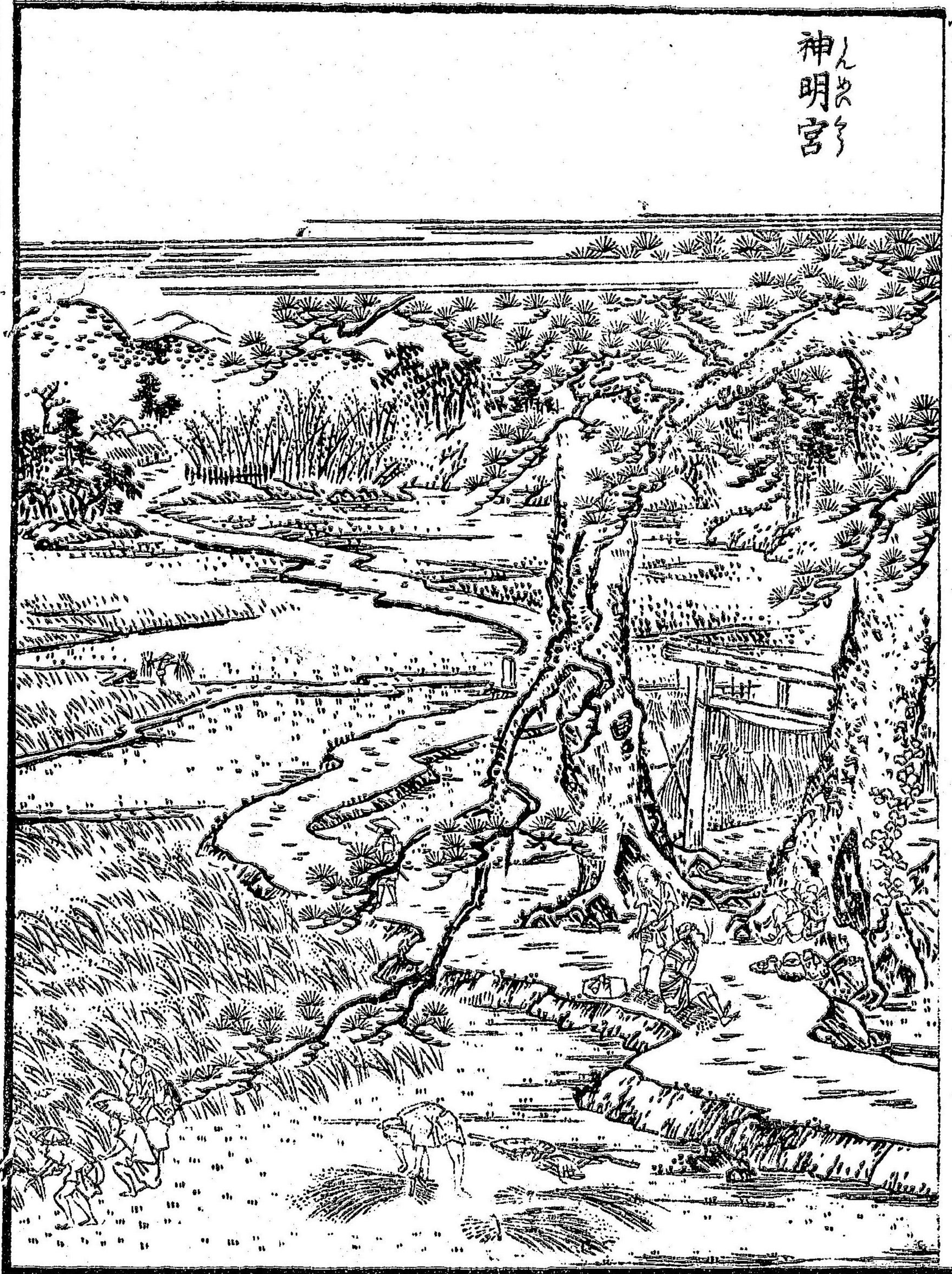
大角信勝筆

熊野推現祠 本堂の左の方此山にあを往古行基大士此地は云々
出見ありし神靈と祀る其白狐は踏つるものと拾荷と一靈

鳥ノ衆と稱すの熊野推現と云ふ由縁起
麻耳山 熊野阿闍梨の社に於て弘法大師獲摩壇の四跡と稱す是ありん



神明宮



鯨鐘

七ツ石

堂の石の方境の址より、同鐘は弘安九年九月十五日、鈴川のほとりにて願主
 法印長慶とて名を注せり。今の鐘は寛政十年に改鑄せり。
 神変奇異の靈石なり。自ら現れ自没する人恒に其在所とてあはれむと云ふ
 若し堂舎破壊及び修理の力を以てする時、國々々々、此石現れり。其
 然、ハ初敷金銭等涌り出づ。輻輳のり、頻年御堂の再興と云ふ。其
 同、御禮家の庭中、御堂のり、頻年御堂の再興と云ふ。其
 傳、り、不、知、工、匠、の、資、財、を、果、し、明、和、三、年、造、營、の、功、を、金、く、り、由、
 見、よ、靈、物、集、小、ま、ま、と、此、石、今、二、王、門、の、傍、に、ニ、ツ、ツ、の、石、を、見、り、
 存、し、當、寺、表、門、の、前、耕、田、の、中、に、も、一、ツ、ツ、あり、と、共、小、四、ツ、ツ、ハ、今、現、然、り、其、餘、の、所、在、ハ、
 と、り、

二王門

小田原北条家制札

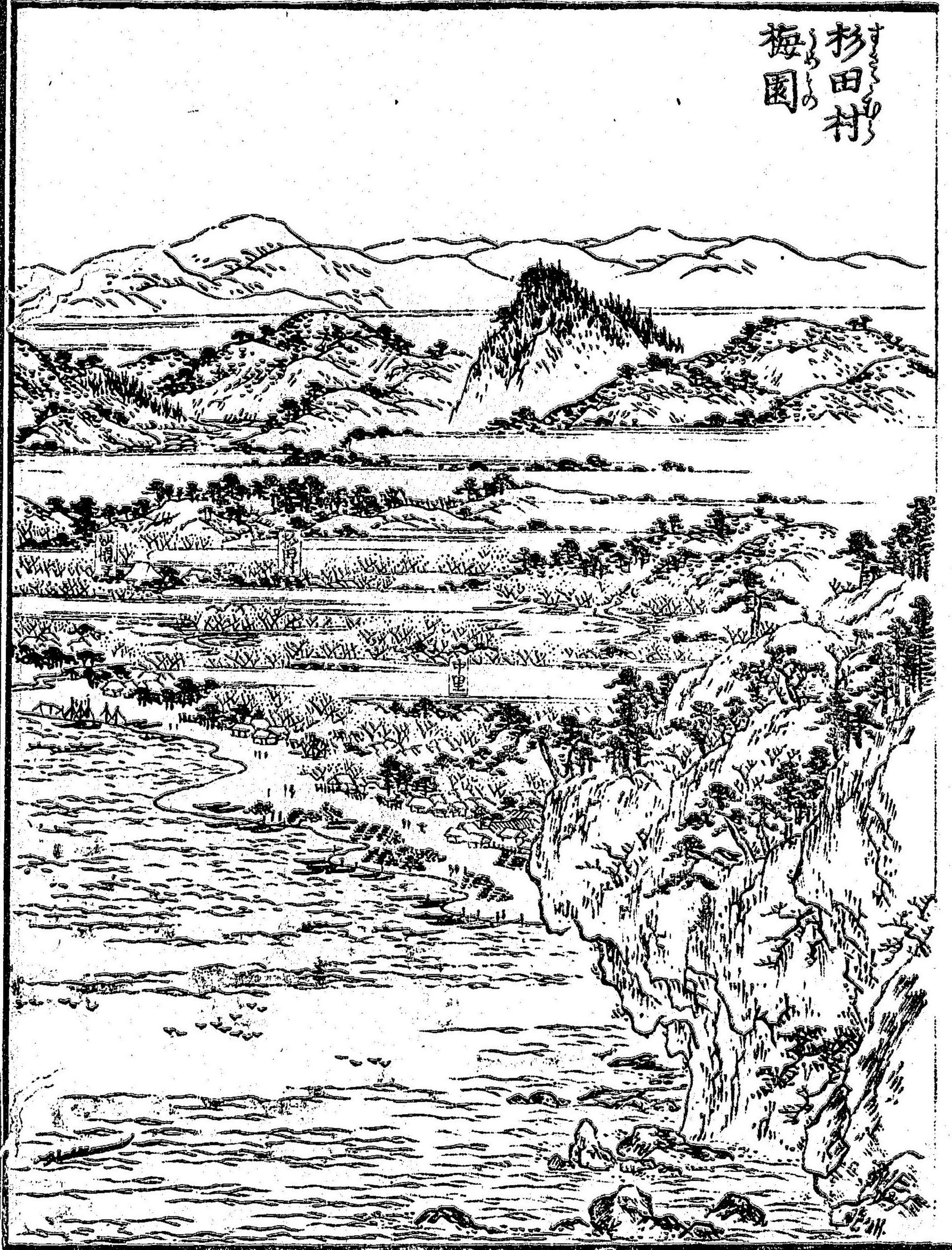
同寺領寄附證文

石階の下、ゆの、金剛密通の両傍、運慶の作り、各九尺餘、其の
 石巻、瑞應山と筆、一ツツを依、木玄竜の畫あり。
 永禄十年丁卯十月二日
 石巻、瑞應山と筆、一ツツを依、木玄竜の畫あり。
 天保二年癸卯二月十八日
 石巻、瑞應山と筆、一ツツを依、木玄竜の畫あり。

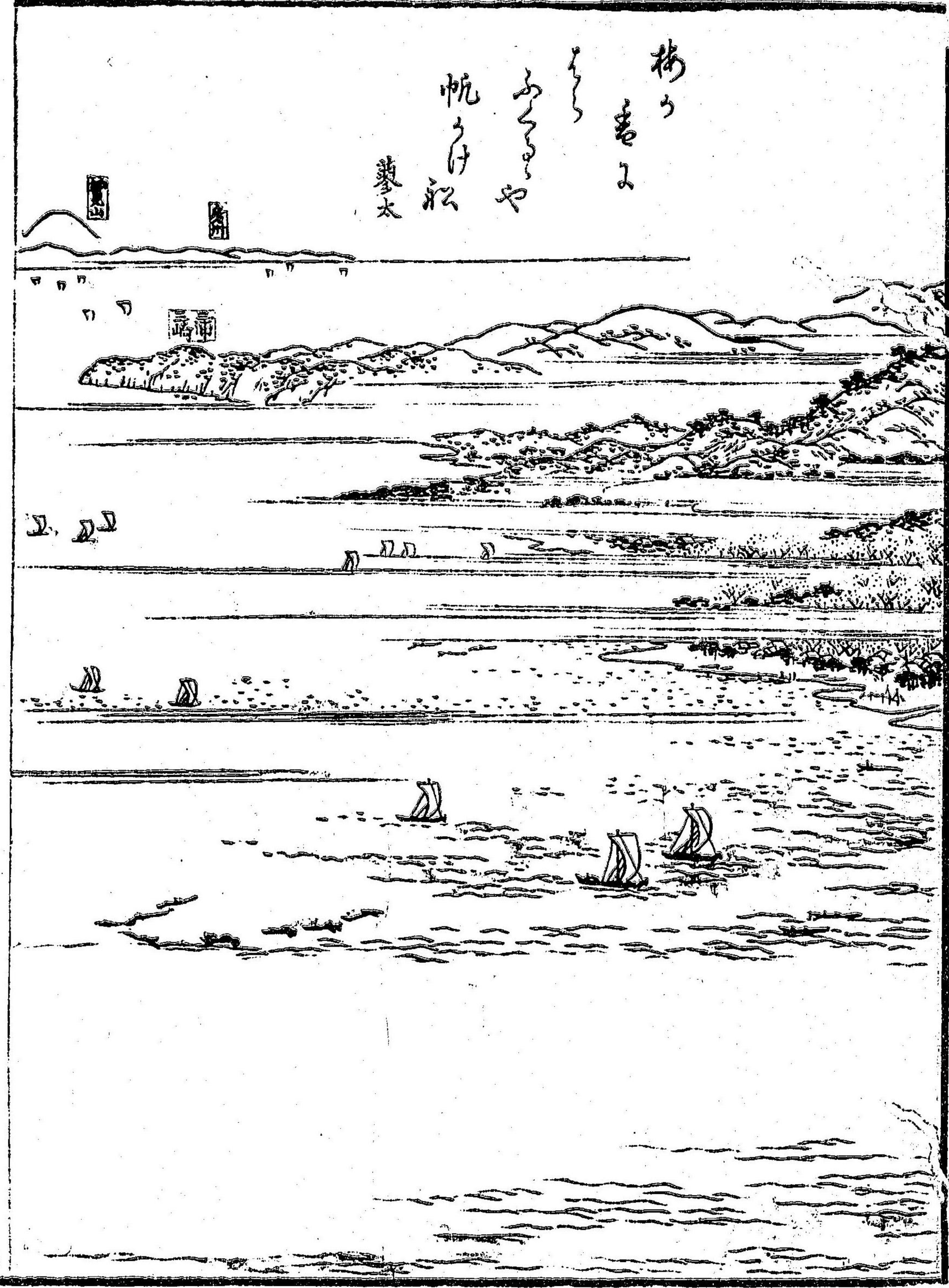
本尊縁起

曰く、人皇四十五代、聖武天皇の御宇、行基大士、東國
 遊化の頃、此地に至り、まの、空中、小白蓮、乱飛、山、上、り、
 散墜、を、大士、怪、む、山、小、登、り、ま、の、果、し、神、人、の、り、を、り、一、
 白狐、を、乘、り、一、ハ、靈、鳥、を、乘、り、今、境、内、は、鎮、座、の、熊、野、各、大、士、
 告、て、曰、く、去、る、養、老、年、間、印、度、の、善、女、畏、三、藏、遠、く、我、

杉田村
梅園



梅
う
喜
よ
帆
う
け
船
藤
太



杉田村
海鼠製



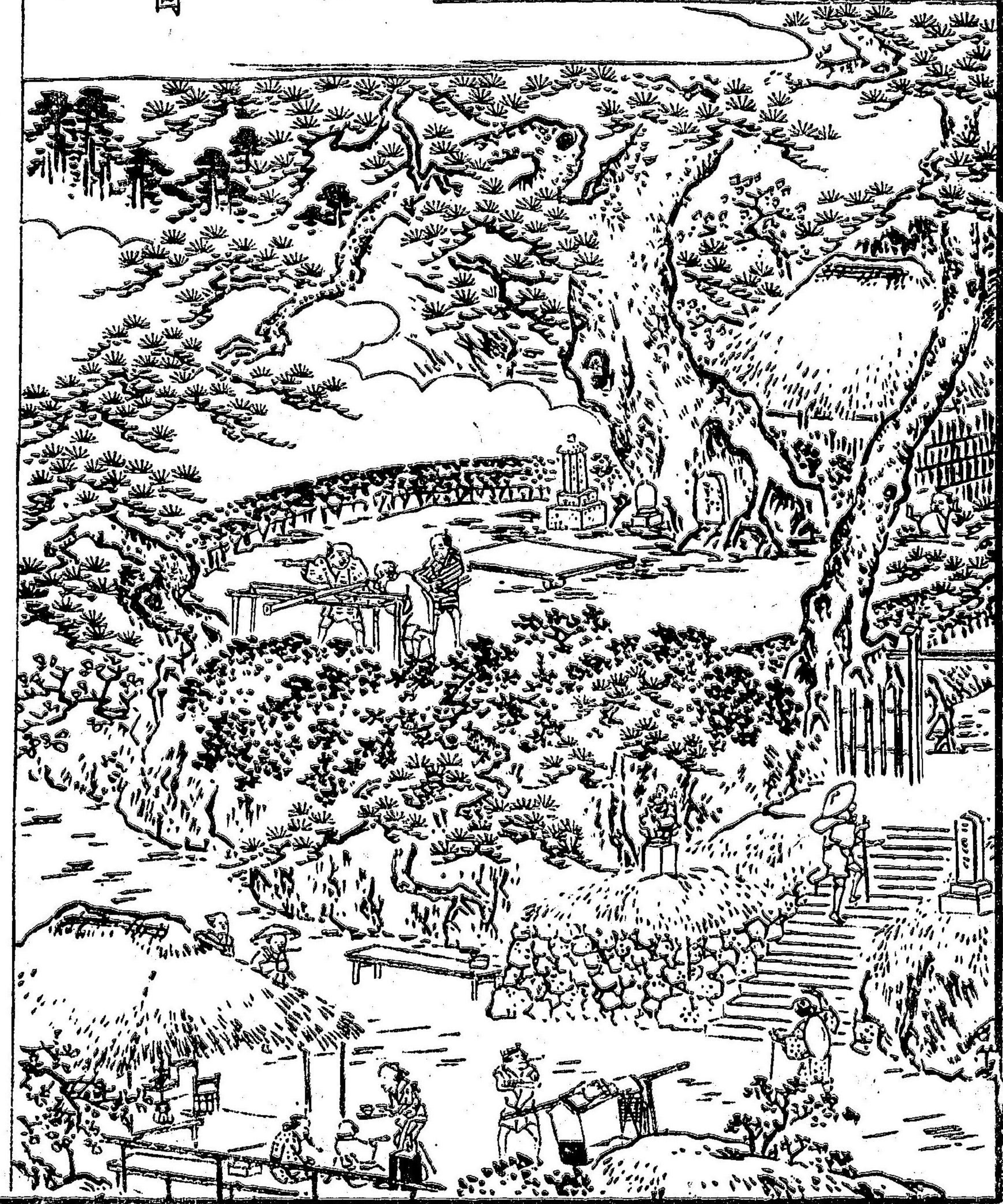
日本の土小渡と密教の機縁を要むと云々終不此地亦来
 心と止り七箇の幡石を加持一
 又其石小陀羅尼
 と書寫一此山は鎮く結界一
 又云託て其方と云々
 あふ於く大士善無畏の素懐を鑑く
 十一面の尊像一軀を
 彫り又弘仁年間弘法大師此地に錫を飛
 無畏三蔵の舊を興一行基大士の跡を継ぐ
 大悲者於淨
 刹と初め伽藍安鎮の爲め四臂の不動尊
 作を
 密教護神の法樂をも般若心經を書寫
 一人法繁榮の
 爲め一千座の護摩を修一且大黒愛深
 貳字の宝塔
 一基是皆大師の製一多の遙の後長曆の頃武相の
 間疫癘流行一人民大不是を患ふ時
 當寺中興光慧
 阿闍梨本より祈り此疫災を除滅せしむと云々
 此地六浦莊の内なり吉田兼好法師も此地に住れ

金澤

つりつりの家集よと云々
 竟惠法師の北國紀行も神異
 絶妙の勝地なりと稱せられ
 往古巨勢金岡此地の勝
 景を摸一畫むと及つて筆と投一嘆賞を大明
 心越禪師ハ其佳景西湖に似ると云々
 其八勝は淮疑一
 八詠の詩賦あり

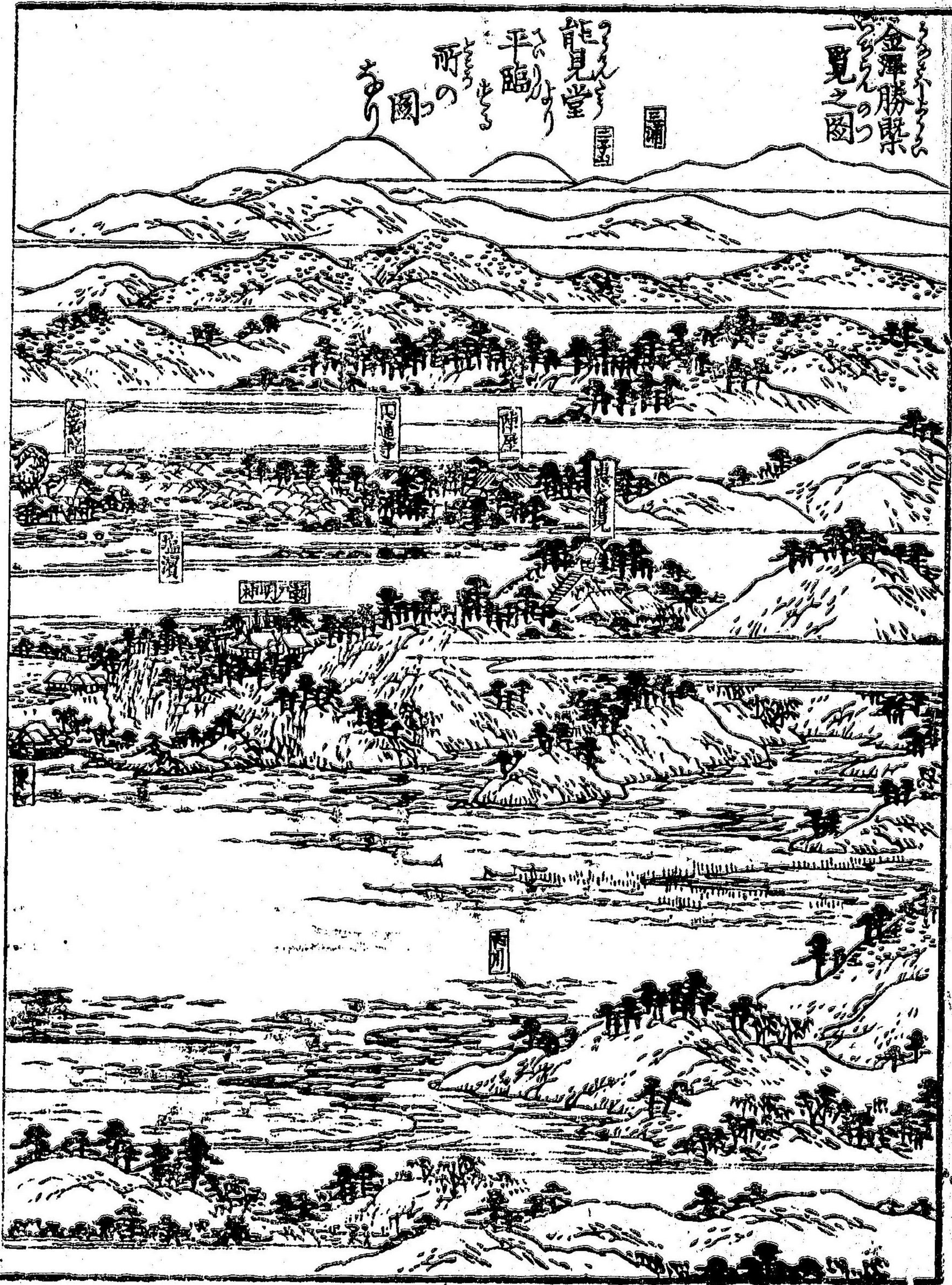
洲崎晴嵐 瀨戸秋月 清瀨消々 飄處共者 暮雨凄涼 相識賜断 朝宗萬派 雲外依稀 風青名藍 生悟一名 平瀉落雁
 嶺餘暉 流水依依 繫舟際 輪島際 亦驚甘泉 鐵笛聲 連天無恙 帆掛日邊 款乃高歌 落
 狂波遠竹扉 市後日斜人 中秋廣寒桂子香 聽分明蓬窓 掩寒無 乃高歌落 若鯨音 幽明聞者咸

西山 宗圃
 松 擲筆 是ハ 柳 如 涼



能見堂
 擲筆松
 此所より
 金澤の勝
 景を平臨
 する園ハ
 大なる





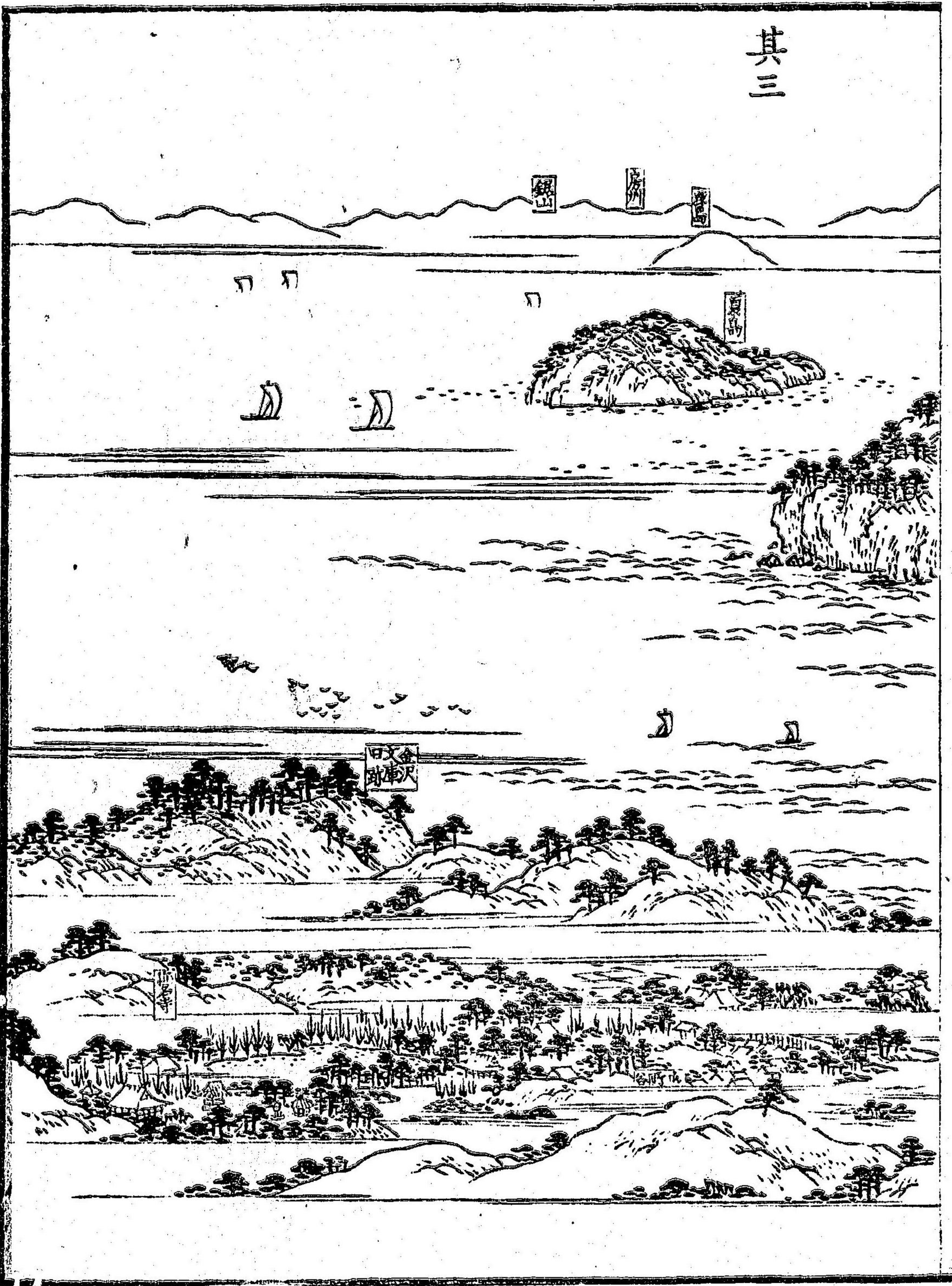
列陣冲冥堪入塞款蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食恁
 樓內川暮雪沒潛奇花六出以鋪練渾然王砌山
 廣色通覆危峯露些尖
 河野鳥夕照是作家持竿盪漿日西斜網得魚來沾
 酒飲披蓑高臥仕堪誇
 武州金澤擲筆山能見堂有蒲相八景之風味因觀
 鍊倉志甚詳一夕寥寥對青燈漫賦八景之陋句以
 識斯勝境云歲執徐夏日
 東阜越杜多州

能見堂 金澤稱名寺の良の山上ありて禪宗の草庵あり
 本寺の地藏井ハ惠心僧都の作也一寸八分有りと云
 後世立像二尺五寸計の地藏菩薩と作りて靈像とハ
 其胎中よりありて云故に此草庵と地藏院と号く
 近世久世和州侯源廣之建立ありてを擲筆山及び
 能見堂等のニツの額も共心越禪師の書なり
 巨勢金岡なるもの其真景を写さんと筆比及ハさず



其二





以絶倒くまののけん堂と云と梅花無盡蔵は濃見
堂は作る或人云此地より望めハ瀬戸の八勝も皆能見

ゆ故能見道と云とつと

澤庵和尚のうらぶ記は能見堂の松と云立より金澤と見え
詞中及うと記されしを地蔵を木とせしむ六道能化の意ハ

擲筆松堂前ハ存る所の大松を巨勢金岡此地の勝景筆中と

梅花無盡蔵 出金澤七八里許攀最高頂則山々

水々面々之位致昔畫師金岡絶例擲筆之處有
名無基但其名不甚佳相傳曰濃見堂也中里又
云畫師擲筆之峯云云

登々前畠路攀高 景集大成忘却勞 萬里居士
秀水奇山雲不裏 畫師絶例擲筆 秋毫

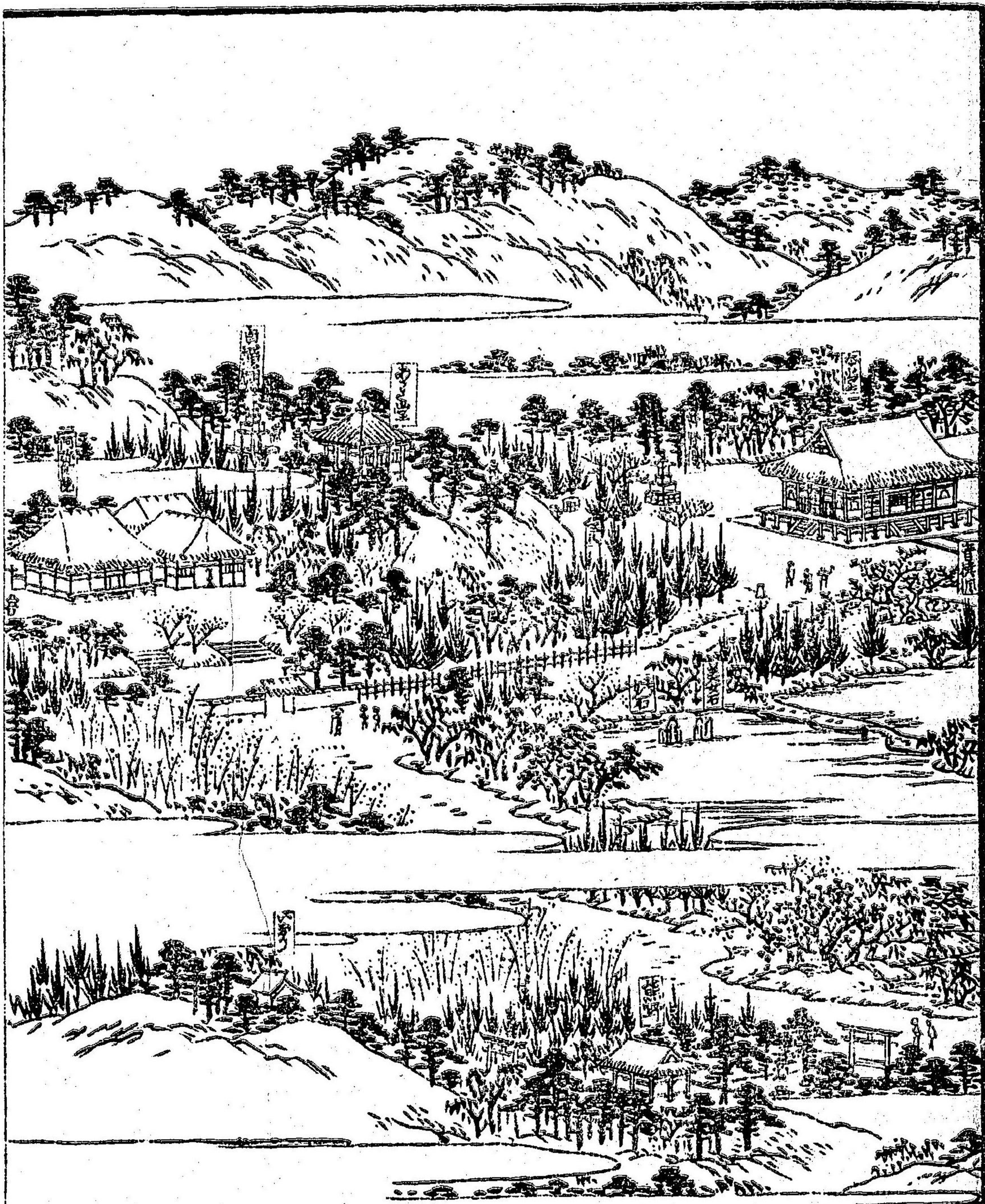
海 宗因

此地に至る金澤の勝景を望めハ畫々如く南より西

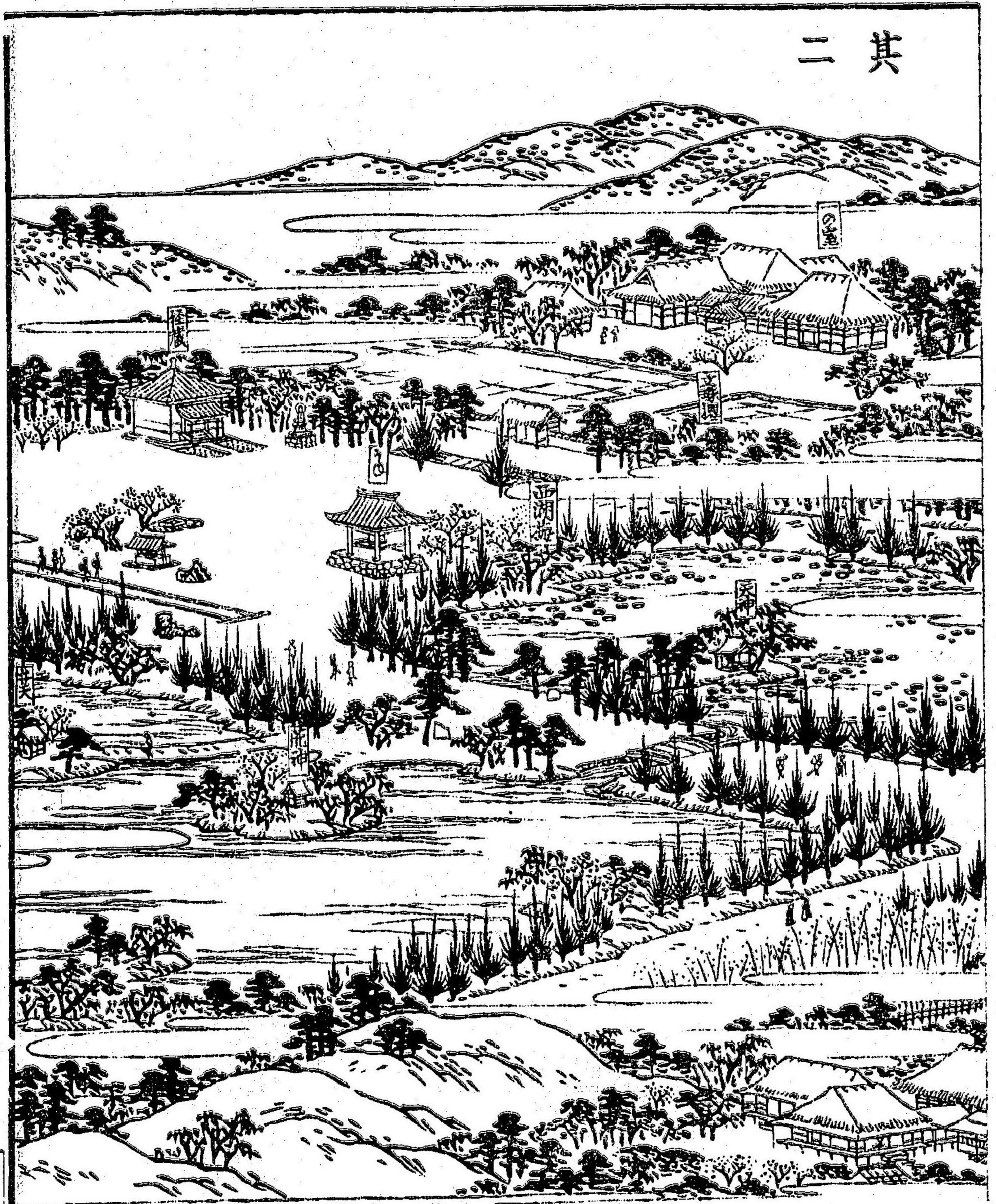


寺名
称





其二



金澤頭時墓



金澤貞顯墓

大檀那越後守平朝臣實時實泰谷禪尼

宋入求沙弥 小比丘 圓種述 慈洪書

改鑄鐘銘并序
此鐘成乎永曆
力非募士女更
伏乞先考超三
於光世音暨乎
洪鐘之起其始
質備九乳形象
三界五趣無八
之朝之夕無愚
賢凡厥聽者
同驚見金仙
聞無明眠
稱于竺玄
警十銘曰
遙地並位
餘道也
鐘矣因勸
無不可
青鑄者
實應聲
一鐘餘
典種道
周與典
觸周典
夜觸典
夢與典
凡厥聽者
同驚見金仙

正安辛丑仲秋九日

大檀那入道正五位下
行前越後守平朝臣顯時
法名慧日當寺住持沙門審海行事比丘源阿大工
大和權守物部國光山城權守同依光

金澤頭時墓
同貞顯墓
當寺大檀那阿弥院後の山の中腹より
高七尺餘の五輪の石塔あり
同所より頭時の子なり石塔ハ
五輪あり高より前より程あり

美女石 燒石 とよとよ池の中橋より西にあり 金澤 今一木を裁く
青葉楓樹 納堂の前鐘樓の傍にあり 舊樹 ハ樹今一木を裁く
金澤 八木と称するもの一あり 謝 此を是を指す

北國記行 金澤より行く 林名 よとよ 村 のまあり
わー 為相解の

しあはれは一本此時自心 あはれは一本此時自心
とけり とけり 一 一 本 本 此 此 時 時 自 自 心 心
とけり とけり 一 一 本 本 此 此 時 時 自 自 心 心

東國記行

東國記行 此の記行は
宗牧

あはれは一本此時自心 あはれは一本此時自心
とけり とけり 一 一 本 本 此 此 時 時 自 自 心 心

鎌倉記行

秋 秋 の の 記 記 行 行
あはれは一本此時自心 あはれは一本此時自心

西湖梅

西湖梅 西湖梅
鐘樓 鐘樓 の の 影 影 あり あり 花 花 の の 重 重 瓣 瓣 あり あり 潔 潔 白 白 かり かり

梅

花 花 無 無 盡 盡 藏 藏 曰 曰 貼 貼 西 西 湖 湖 梅 梅 詩 詩 序 序 律 律 寺 寺 西 西 湖 湖 梅 梅 以 以 未 未 開 開
丙 丙 午 午 遺 遺 恨 恨 富 富 余 余 則 則 入 入 相 相 貼 貼 西 西 湖 湖 梅 梅 詩 詩 序 序 律 律 寺 寺 西 西 湖 湖 梅 梅 以 以 未 未 開 開
為 為 遺 遺 恨 恨 富 富 余 余 則 則 入 入 相 相 貼 貼 西 西 湖 湖 梅 梅 詩 詩 序 序 律 律 寺 寺 西 西 湖 湖 梅 梅 以 以 未 未 開 開
唯 唯 見 見 蓓 蓓 蕾 蕾 而 而 雖 雖 未 未 見 見 其 其 花 花 豈 豈 非 非 東 東 遊 遊 第 第 一 一 之 之 奇 奇 觀 觀 乎 乎
哉 哉 金 金 澤 澤 於 於 稱 稱 蓋 蓋 先 先 代 代 好 好 是 是 之 之 花 花 主 主 屬 屬 南 南 余 余 作 作 移 移 杭 杭 州 州 西 西 湖 湖 朝 朝 金 金 之 之 乎 乎
梅 梅 花 花 招 招 提 提 遊 遊 十 十 年 年 度 度 背 背 以 以 西 西 湖 湖 呼 呼 之 之 余 余 作 作 移 移 杭 杭 州 州 西 西 湖 湖 朝 朝 金 金 之 之 乎 乎
遺 遺 恨 恨 翠 翠 禽 禽 啼 啼 十 十 年 年 度 度 背 背 以 以 西 西 湖 湖 呼 呼 之 之 余 余 作 作 移 移 杭 杭 州 州 西 西 湖 湖 朝 朝 金 金 之 之 乎 乎
春 春 摘 摘 其 其 花 花 數 數 十 十 年 年 度 度 背 背 以 以 西 西 湖 湖 呼 呼 之 之 余 余 作 作 移 移 杭 杭 州 州 西 西 湖 湖 朝 朝 金 金 之 之 乎 乎
之 之 條 條 舊 舊 廬 廬 其 其 花 花 數 數 十 十 年 年 度 度 背 背 以 以 西 西 湖 湖 呼 呼 之 之 余 余 作 作 移 移 杭 杭 州 州 西 西 湖 湖 朝 朝 金 金 之 之 乎 乎
所 所 貼 貼 其 其 花 花 數 數 十 十 年 年 度 度 背 背 以 以 西 西 湖 湖 呼 呼 之 之 余 余 作 作 移 移 杭 杭 州 州 西 西 湖 湖 朝 朝 金 金 之 之 乎 乎
觀 觀 焉 焉 并 并 以 以 花 花 數 數 十 十 年 年 度 度 背 背 以 以 西 西 湖 湖 呼 呼 之 之 余 余 作 作 移 移 杭 杭 州 州 西 西 湖 湖 朝 朝 金 金 之 之 乎 乎
西 西 湖 湖 梅 梅 貼 貼 軸 軸 詩 詩 題 題 之 之 新 新 造 造 化 化 所 所 設 設 高 高 堂 堂 一 一 見 見 之 之 日 日 招 招 余 余 昌 昌 茂 茂 濃 濃 之 之 開 開

六浦秘法日荷上人
 称名寺の住僧と
 蔵ふ基と園と枝
 寺の二玉と
 賭物と
 上人勝り
 くれい終み
 これを負く
 甲州身延
 山へ至られ
 ころりと云
 大力與双の入
 たり



前朝金澤古招提 遊十年遲雖壘臍
 梅有西湖指枝拜 未開遺恨翠禽啼

一横枝上粘西湖 名字斯花別不呼
 意外春風真假合 傍入定道益成圖

櫻梅 同所あり花は重辨 普賢象 本堂の前左の股より一品に
 文珠櫻 同所あり普賢象の對一の 一室 鐘樓の後あり門に一の

今ハ龍窓せり澤庵和尚の鎌倉記に於ての堂とての書せしを揚ぐ
 声のたのむと坐禪觀法の床とありて似とありて實永乃

阿弥陀院 本堂より左山の傍より 二王門 樓門の左右に安置
 運慶の作あり此二像ハ杉田村東禪寺とありて

回の二王尊ハ六浦の荒井平次郎光吉出家 終日荷上人勝り
 称名寺の住僧と基を圍二玉と賭とを 六浦上行寺より其二玉の像の玉眼

二玉の像をゆる身延山に送られりと 大浦上行寺より其二玉の像の玉眼
 なりと稱する五寸の玉と傳へり

熊野新宮 當寺の西岡の上あり
 寺寶 佛舍利 祖相讓の舍利と号しと代
 因室生山小約置とと 龜山帝の勅に

龜山帝の勅に

當寺へ移し納せり昔ハ 彌勒佛泥塑像長三寸座像 請雨經論弘法大師の作 愛深明王金銅像龜山帝の御念持佛 共ニ管丞相の眞跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行二十五字あり此論ハ一部百卷あり其卷の十卷は書つらり餘ハ鎌倉の極樂寺に三卷同存天神二天紀州高野の金剛三昧院ハ一巻江州作生島ハ一巻以上合せると其外古佛多枚奉りし其餘の二卷ハ所在あられざる鎌倉志よりしるす

大界外相圖 元亨三年當寺結界の圖なり其光景尤大廈高堂の形あり今ハ異なり其裏書の樹は五

元亨三年癸亥二月廿四日 答法 羯摩師 極樂寺長老 忍公大德 多宝寺長老 俊海律師

當寺本願越後守實時及び顯時貞時貞持等の画像の懸幅あり

揚貴妃玉簾一連 初尾州熱田の御あり

梅花無盡藏日 金澤林名律寺間 色録龜山帝の勅あり 遺恨矣珠簾猫兒 支竺群書之目錄 無介者而不能

融目云云 注曰 称名寺水晶簾唐猫見之孫 一大時教及郡書

蓋先代貯焉 又曰寺秘件々之物容易元使人看之也

田國雜記

卷の長三尺四寸ひろさ四尺少くは精の...
此の...
此の...
此の...
此の...
此の...

北條陸奥守制札 道真 惟后

北條陸奥守制札

金澤阿弥陀堂称名寺領敷地并垣場等事

右於當所軍勢并甲乙人等不の致些妨損藉若於
令遠承軍者為被處罪科之被注申交名状依仰
執達如件

康安二年五月廿四日

陸奥守

永享十一年称名寺領結解状 註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解状事
合八十貫文内

六十九貫六百分

寺納

八貫文

代官給

一貫文

徳妙衣料

八百文

夫領路錢 兩度四人分
年貢運上時

三百文

今津問方酒直

三百文

六浦六郎方礼儀替錢之時

已上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日

政所憲意判

當寺ハ北条家繁昌の昔魏々たる巨藍なりとも物換り
星移り堂宇多く破壊して今ハ山圍と古木聳えそ松杉

梢とありそ人常小鬱々あり房宇少えそりそ寂寞の
扉と閉ち座禪觀法の床とありそに似たり

金澤文庫舊址 阿弥陀院の後の畠と云 東野文集よ寺前の
土庫文庫の称茂

冒と相傳北條越後守平顯時宮建そるおのり内
和漢の羣書と納め儒書や墨印佛書ハ朱印と用也

印文ハ楷字やと堅よ金澤文庫の四字と注す 印章の
模形を

其後ハ荒廢し書籍散失せりともあり 丙辰把柄ハ越後守
其後ハ荒廢し書籍散失せりともあり

清原の教隆ハ群書治要と續せそ余々そる 清原の師光ハ左傳教隆
群書治要存民要術律令義解本朝文粹續本朝文粹續日本紀をのそる

其外人家ハありそ一部とそる 東見記云金澤文庫内ハ左傳の卷本三十卷
中原師光ハ跋ありとあり鎌倉志ハ一切経の切残りともそる 弥勒堂ハありと云

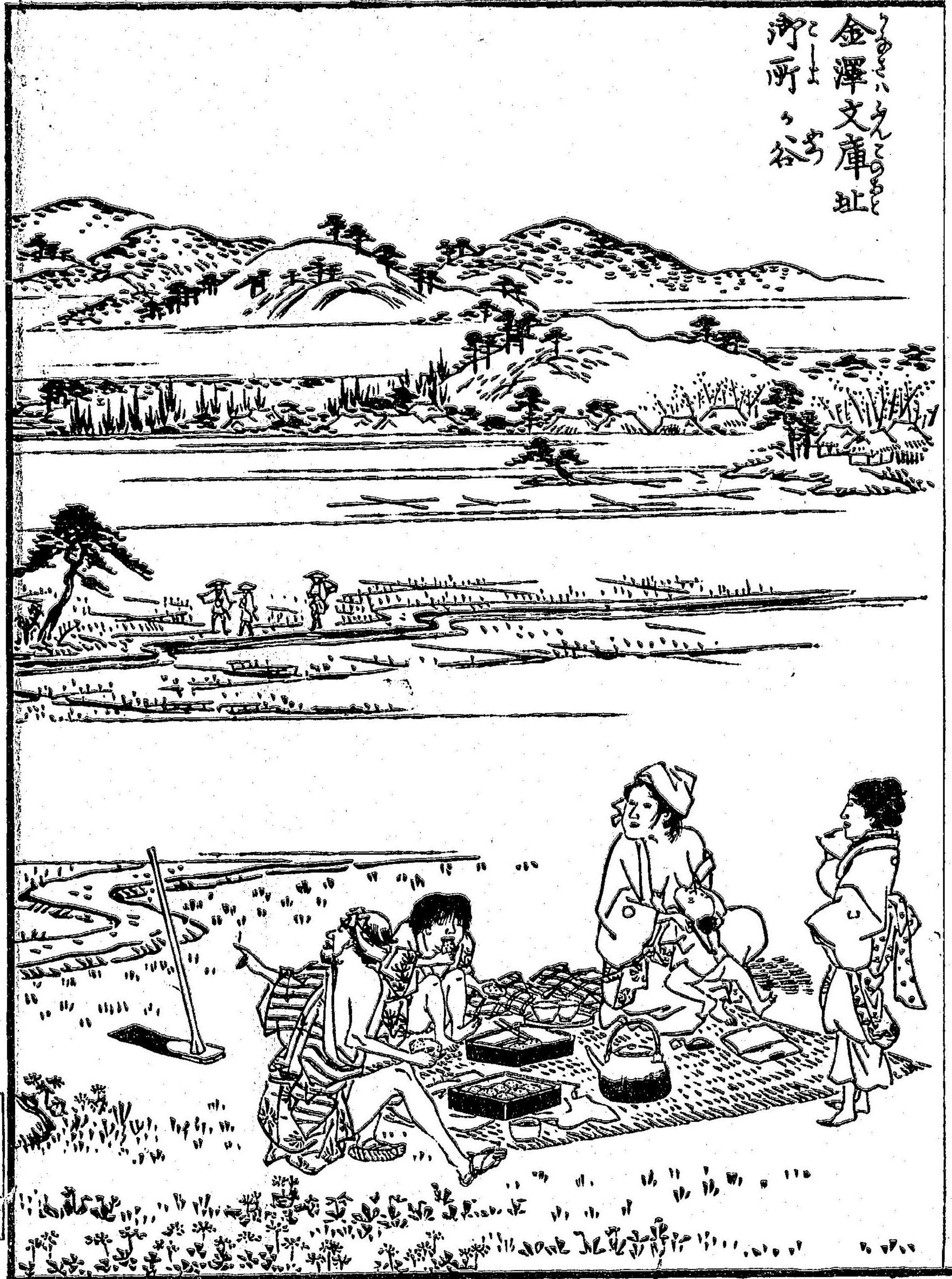
其外人家ハありそ一部とそる 東見記云金澤文庫内ハ左傳の卷本三十卷
中原師光ハ跋ありとあり鎌倉志ハ一切経の切残りともそる 弥勒堂ハありと云

印面大
共如圖

金澤文庫



金澤文庫址
河所谷



鎌倉大草紙云武州金澤の學校ハ北条九代の繁昌此
昔學問あり一旧跡かゝる是を今度彼文庫を再建
し種々書籍を入置又上州ハ上杉々分國ありされハ
足利ハ京并鎌倉名名字の地あり他ハ異なりや彼
足利の學校を建立し種々の文書と異國より求め
納む此足利の學校ハ上代兼和六年ハ小野篁上野
の國司より一時建立の所同九年篁陸奥守あり
下向の時此兩學校を建てる由其旧跡今残り
るを應仁元年長尾景久ハ沙汰と政所より
今の兩校移る建立しる近代の岡山ハ快元と中禪
僧なり今度安房守公方ハ名字掛の地あれハ
學領を寄進一弥書籍を納め學徒を憐愍せよハ
此項ハ諸國大にともは學道絶るハ此所日本

一所の學校とある是より猶以上杉安房守憲実と
諸國の人をほめたるハ一西國北國より學徒悉く
集ると云く

觀金澤藏書而作

義堂藏書

王帳修文講武餘
牙籤映日窺斗
北上一編看不足

遺人來
縹帙來
鄴侯三
收在胸
中歷五
車如

慕景集

二月將葉金澤の文庫より抄り
日向の元の時より
くわんがんとを供り

丙辰記行

懷古淚痕羈旅情
人亡書泯幾回歲

府儒早晚起蒼生
境致空船金澤名

御所
龜山帝の行宮の跡なりと
阿弥陀院の後の切通と出る畠と云里俗云く
道ハ則佛泰詣の鎌倉志

持資

此帝勝地佳境へ遊歴のよみあり地も此地へ浄寺のよみ
舊記を見えずと
魚好法師閑居回跡 其地今あへりてす
魚好家集 武蔵国富士郡の西に有る浄寺の跡なり

右師の法号あるの跡のよみありてす
魚好法師閑居回跡 其地今あへりてす

藥王寺 三療山と号し称名寺の前道より左側ありて古義の
真言宗ありて龍華寺は属を本寺に胎藏界の大日如来
ありて座像三尺ありて當寺は蒲御曹司範頼卿乃
靈牌ありて表小大寧寺道悟裏は天文九年庚子六月
十三日と記しる由鎌倉志に物とありて今その牌
よるよりあり

藥師堂 本堂の前右の方ありて廊とありて本寺に龍華寺の像取士十二神の
像ありて其法号を攝りて藥師寺と号し大寧寺と改むる所ありて
其法号を攝りて藥師寺と号し大寧寺と改むる所ありて

天然寺 法爾山と号し同所藥王寺より九丁ありてを隔
て瀨戸街道より野島へ杉道の左側ありて浄土宗あり
て鎌倉の光明寺に属せり本寺阿弥陀如来の木佛あり

座像ありて一尺五寸計ありて作者ありては岡山も然奉
禪方和尚と号し永祿二年二月二十六日は寂せり寺宝は弘法大師及び惠心僧都
等の畫りて佛像四五幅あり

龍華寺 知足山弥勒院と号し天然寺より五六町南の方瀨戸
街道洲崎村と町屋村の間道より左側ありて古義の
真言宗の檀林ありて御室仁和寺の末に
本尊大日如来八座像二尺餘り右は弥勒佛の本像を安置
す共は作者を志し左は安置の不動菩薩ありて行基大士の
作ありて太田道灌入道寄附ありて云岡山も法印



町屋村
龍華寺



融^と辨^と鐘^と樓^と其^と文^と左^との^と方^とに^とあり

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺

唱鐘知識文 夫滄海者鱗甲所潛泰岳者翔蹄所集則知智池者
念塵所浴靈鐘者亦苦歎及河脫三界苦得見菩提
留名王之望劍兼亦歎及河脫三界苦得見菩提

菩薩勝慧者 乃至盡生死 恒作衆生利
而不趣涅槃 一般善及方便 智度悉加持
諸法及諸有 一有頂及惡趣 諸伏盡諸有
令得淨除故 不有垢所染 大安樂富饒
不知蓮體本 大欲得清淨 諸安樂富饒
不染利群生 能作堅固利 諸安樂富饒
三身得自在 隨求陀羅尼 諸安樂富饒
北七尊聰陀羅尼 隨求陀羅尼 諸安樂富饒

光明真言

天文十年辛丑五月五日

當寺住法印權大僧都善融 檀那古尾谷中務少輔平重長 道傳

寺寶兩界曼荼羅 涅槃像 一幅共唐畫中 八祖畫

像 一幅弘法大師 減ハ履行 十三佛 補像 一幅中持如の 不動畫像

五指量變 洗明王像 一幅弘法大師の 筆當家よ於く 畫の裏書は 大田道灌奇進とあり 寺僧云く

鳳凰頭 龍頭 十箇共 蓮臺の 作の 二種 一の 弘法大師の 持物

當寺ハ 治養年間 鎌倉右府 賴朝公 伊豆國三島 明神と

金澤瀬戸の地ハ 勸請あり 後法味と進ま 爲

文覚上人と共志と合せ 文治年間 六連の山中 精舎を

創建せ 彌勒菩薩の像と安 都卒の四十九院

準擬一四方ハ 六八の 僧坊を 建淨願寺と号 庄園若干

と寄ら 當寺 還ら 往古 弘法大師 獲摩訶 然一あり 殿堂

覺と並ハ 粉壁ハ 月の光と移せ 伽藍ハ 博敞あり 丹桂と

星の林とせり 後 正嘉年間 南都の 恩性律師 當山小

星の林とせり 後 正嘉年間 南都の 恩性律師 當山小

浦の郷



鎌倉記行

於夕上流

よき

まゆ

鳥帽

名島

沖

あき

風

こ

津巻和向



有餘の未寺ハ林邑ニ散在シテ年々の法會月々の勤修
 恒例ニ任セテ怠る者ナク寶祚の長文武運の萬歳哉
 祈シテ暮る曉の振鈴の声ハ無明煩惱の眠を覺シ夕比
 梵鐘の響きも三途の迷夢を破る實ニ江南の一精舎也
 善應寺野島山と号シ同所より半道斗を盛濱を隔テ南の
 方野島ニ傍テあり真言古義ゆゑ龍華寺ニ屬シ本尊
 不動明王の像ヲ作者をあるハ心觀音の木像ハ立像ニ尺斗
 あらゝく聖徳太子の作ナリ愛深明王ハ座像一尺五寸斗
 あり弘法大師の作と云此像の胎中ニ愛深明王の小像
 十體と作テ籠らるゝと云
 野島同所東の出崎中々瀨戸橋ハ七八町あり土人
 百軒島とも云民家百軒あり餘る時ハ必災ある處ニ百軒島と
 呼ぶところニ此所の出崎ハ紀州亞相賴宣卿の山の出崎ニ指荷の
 盛風呂の舊地ありと云
 小祠あり又中腹中ニ菅神の宮あり此地の北ニ北を平方と

瀨戸町屋村の東と金澤原との北此地の東北海濱と
 靴の浦と稱せり

鎌倉記行

岩のありて海もひびく自づづ響き
 汀と云ふは秋も色もせぬと云ふれ

舟の跡と云ひあせくありけり野島の多し多積乃之 澤庵

野島渡一野島より南の方室木村へ入渡り舟路

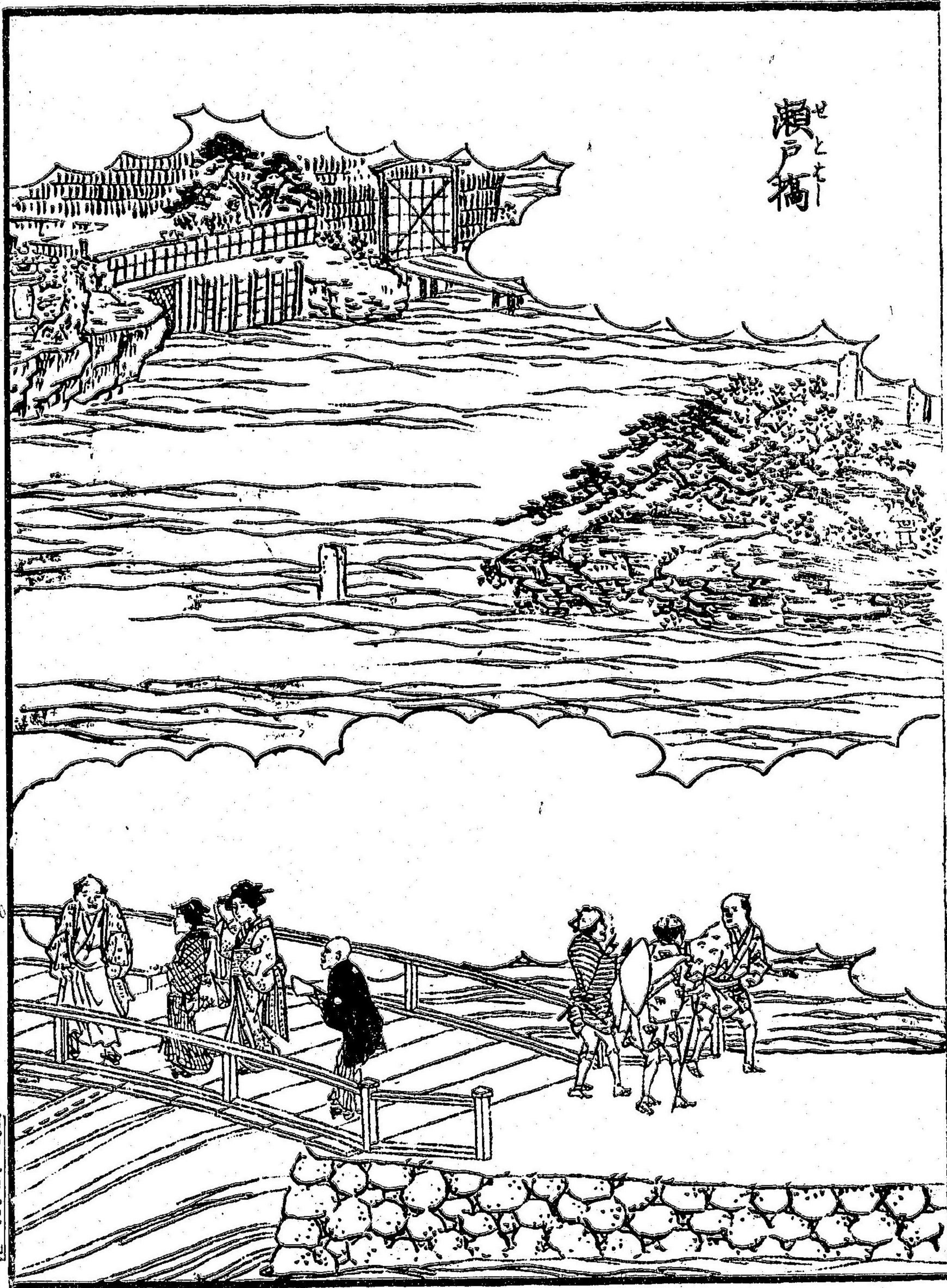
一町餘とあり江戸より浦賀への近道なり

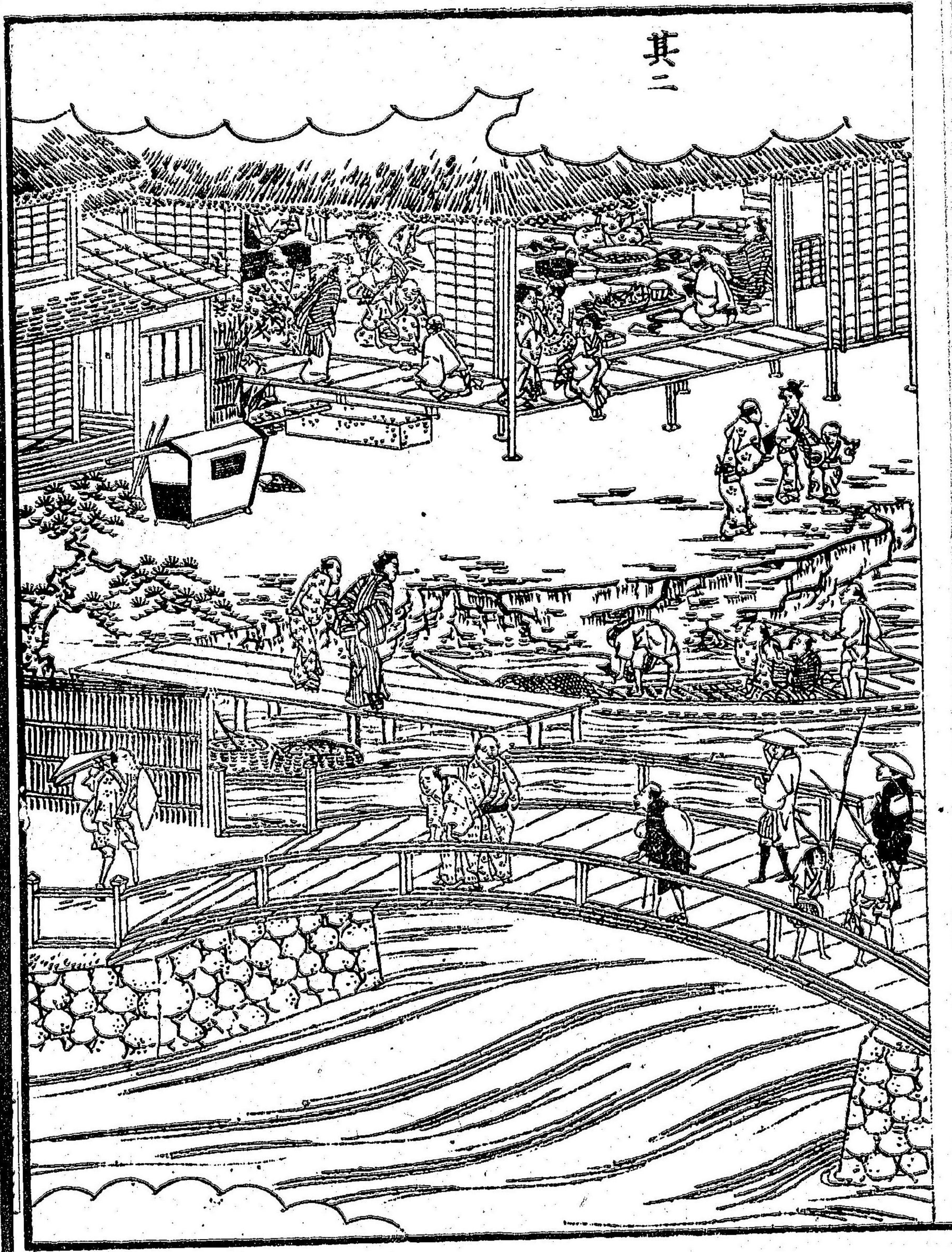
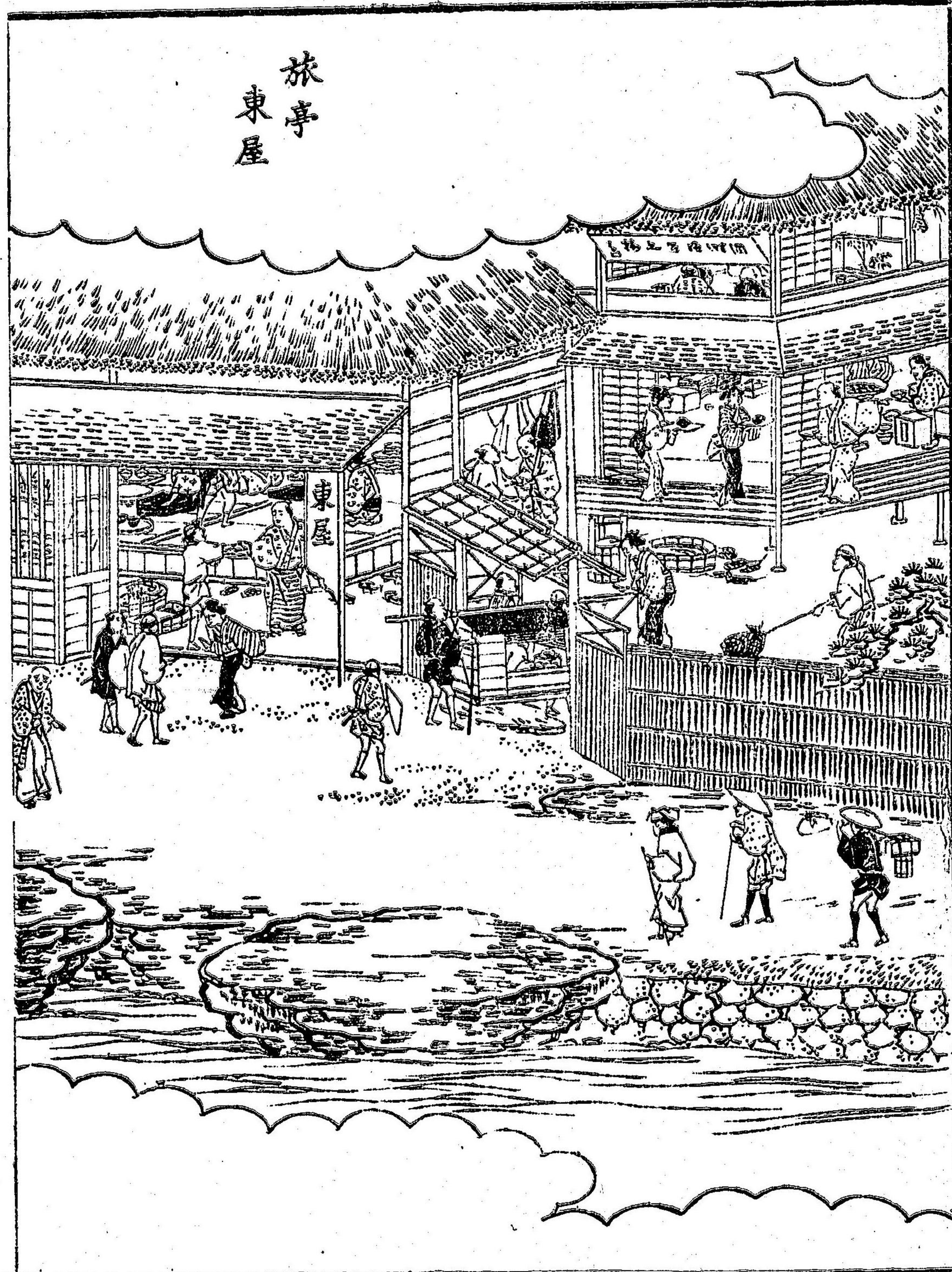
洲崎野島の西瀨戸橋の東北漁村を云鎌倉志ニ云太平

記及び鎌倉年中行事等の書ニ洲崎とありて鎌倉山
 内の西ニある洲崎村のり中々此地ありて云々

瀨戸或ハ追門洲崎と引越村との間と云

四國雜記 瀨戸を海と云つ猶地のまをり





瀬戸の津は海よりあつてついで

かゝりつゝのたゞしくおぼろの瀬戸の汐谷は海は中人

道真 准后

磯山信弘のつゝりしるもあそびあつてついで

あつてついで瀬戸の津は海よりあつてついで

瀬戸橋 同一入江は架せ中間は臺を儲け橋杭を用ひ

しつゝ長と二間あり此橋二川を渡しつゝ

道門の明神と入海よしとあり山あり古木黒き藪は橋あり橋の下より

潮をよみれは遠く遠き山の興まく朝吹とあり朝引ぬき水鳥も陸より

照天姫松 同所北の方西の出崎はあり延寶庚申の大風は

吹おろしつゝ連一株の松の根株のこを存せり里彦

云く照天姫松のゆふ燦られしつゝ姥う焼とりの松と

ついでついで

鎌倉大草紙云 應永三十年癸卯春ひさり常陸國任人

小栗孫五郎平尚重と云者ありつゝ謀反を起し鎌倉

背そつゝれハ源持氏結城の城へ勅座ありつゝ同八月

二日あり小栗を攻め終ひ小栗忍ひく三州へ落れり

とある条下は云今度小栗忍ひく三州へ落れり其子

小次郎初つゝ小忍ひく關東はありつゝ相州権現堂

と云西へ移つゝを其邊の強盜を集りつゝ地に宿城

かりつゝれハ主の中ハ此浪人を常州有徳仁の福者の由

聞く定つゝ隨身の寶ありつゝ打殺しつゝ取つゝ由

終合む去健なる家人せあり何せん云一人は

盜賊中を酒は毒を入吞せ殺せつゝの先と同一宿の

遊女せを集今様を唄せ踊舞戯れり彼小栗城

馳走の舞ひもつゝ酒をよめつゝ夜酔ひ立ちつゝ

照姫と云遊女此間小栗は逢馴此ありつゝのこついで

瀬戸明神社

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色涵波頭無跡
朝陽出海是和光
沢庵



あや自ら此酒を呑きくありきり小栗とあられとされ
由を私言る間小栗も呑極ふとてか酒を更も呑り
る家人たも知れ何れも解伏てり小栗ハ夜初は
幹ゆく林の有る間へ出くえされハ林の内小鹿毛か
馬を繋ぎ置く置り此馬ハ盗人共海道中へ出大名往
来の馬を盗り来られとも才一のあ馬めく人をも馬
とも喰踏られハ盗人共不叶く林の内ハ繋置り
小栗是を聞き密立帰て財宝少く取持て彼馬ハ
衆鞭をもちのち移り小栗ハ毎双の馬乗めて片時の
間ハ藤澤の道場へ弛移上人を頼られハ上人あられ
侍衆二人付り三州へ送らる彼毒酒を呑る家人共
遊女少く解伏てり川水へ流し沈め財宝をも尋取
小栗とも尋られともなうる盗人共ハ夜ハ分散も

酔立たる照姫ハ解り解り酔ふもて酔ハ困れとも本より
酒を呑りされハ水ハ流れ移川下より上りたをり
る其後永享の頃小栗三州より来りて彼遊女を
出種々の宝と与へ盗人共を尋皆誅罰りたり

三州ハ代々居住せり
鎌倉大草紙ハ考ふ照天姫ハ照姫の事と云小栗の名を世り
照氏と稱せれ同書ハ大草紙との事あり道氏と云ふをありハ
小栗系譜と考ふ小栗五郎平満重子助重とあり此小栗
今世ハ云はるハ此大草紙ハ附倉の記を備り

瀬戸明神社瀬戸橋より一町半西の方道より右側よりあり
祭神大山祇命一座之神主千葉氏奉祀也社傳一云
當社ハ右大将頼朝公治承四年四月八日豆州三島の所神と
勸請なりもよとあり鎌倉年中移事ハ四月八日瀬戸
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来り多し... 金竜院の延中... 飛石と

看督長像... 神主... 神像... 世尊寺後二位経尹卿筆

額 山積神宮 世尊寺後二位経尹卿筆

同額裏書曰 延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之 沙弥麻尹

鳥居額 神道長正二位卜部季兼卿筆

鐘樓 額 社前右の方よりあり 鐘銘 三島社鐘銘 洪鐘新製寄器海瑞電神振德衆人結縁韻徹遠近 鑠體黃玄細素益大禪梵感夢驚生元眠昏曉清響

劫々永傳 大戒善提薩埵僧普川筆 應安七年四月十五日奉鑄之

檀那 勸進 沙弥 釋阿并十方四衆等 大和權守國盛

藥師堂 本社の右よりあり

三本杉 延慶庚申の大風... 蛇混拍 本社の右の傍にあり... 梅 花 無 盡 蔵 日 文 明 竜 集 丙 午 十 有 八 年 小 春 二 十 有 七 己 亥 盤 桓 頼 戸 六 浦 之 瀆 遺 廟 之 前 掛 昔 時 諸 同 書 所 作 之 詩 杉 邊 傍 点 劃 不 眠 如 新 錫 之 云 云

同 瀨 戸 社 自注云六浦廟前有古拍屈蟠

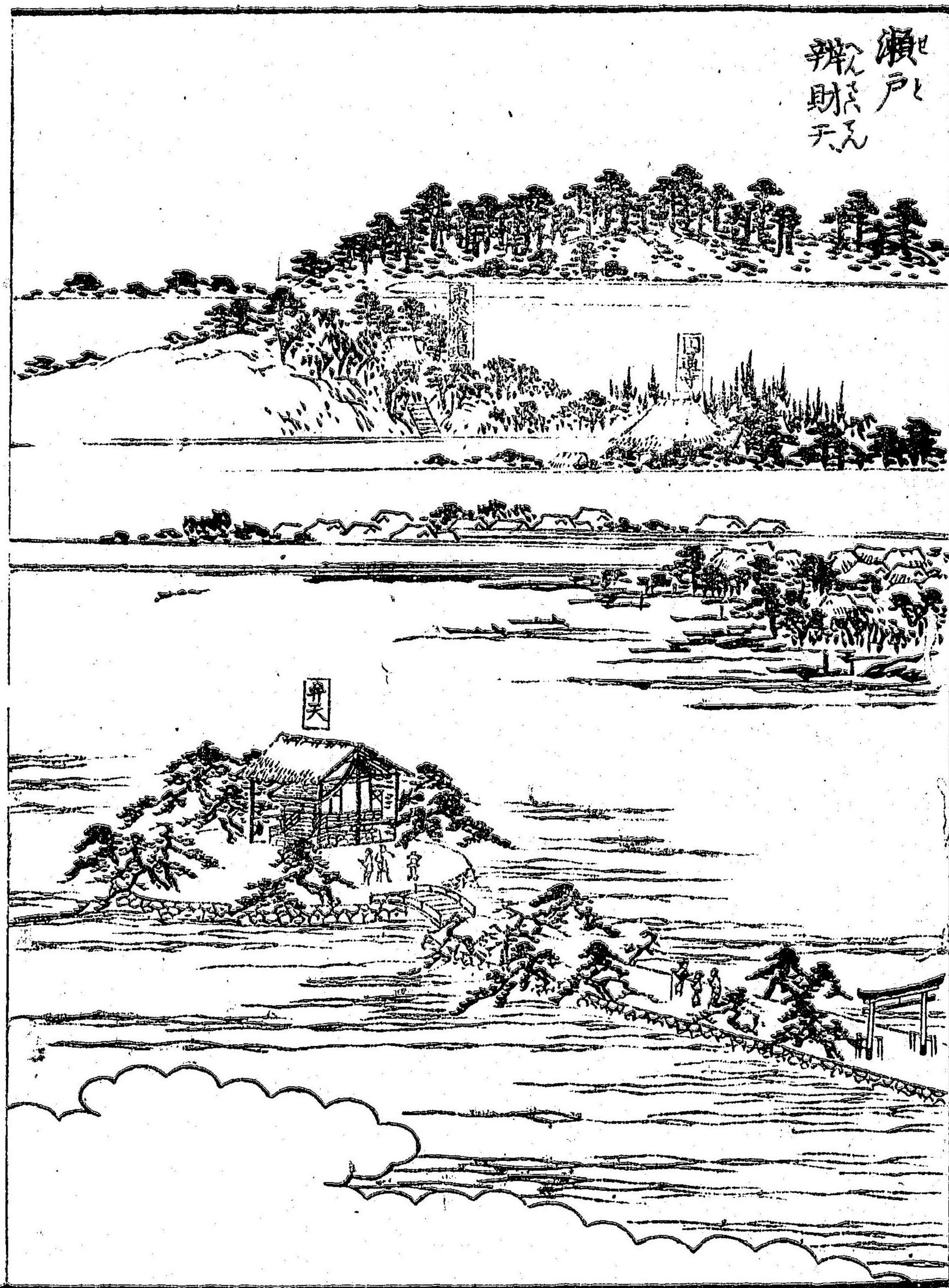
遺廟拍圍六浦橋 朗吟繫馬石支腰
 歸鴉飛破翠屏面 刺被風聲添晚潮

鎌倉紀行

追つての野原へ
 神威をこられる

あつた川を渡ると今も昔も
 当社境内も千歳のお木雲を
 清き田岩社頭をほくみ
 山勢は実一巨靈神の
 此山を遷しえとあやむ
 社前の老樹浦風小靡
 打寄る浪と下枝と洗ふ
 一椀清浄なる時ハ六根共に
 清く我人の頭は神もや
 清く我人の頭は神もや

瀬戸辨財天 同社前道と隔て南の入海へ
 小島よあを昔頼朝卿の御臺所平の政子御前江州
 竹生島の御神と勸清せられるとあり





金龍院
飛石



奇なり 同橋の下に福石と唱るものあり
前中かきと拾ひぬる者あり
あり必福有福の勢ありと云々

鎌倉記行 社名ありと云々

中一才二の格あり高のめより高を測るなり

はるかなるものと云々

圓通寺 日輪山と號せ同所二町半西の方道より右あり

あま昔法相宗中より南都法隆寺に屬せん今八天台宗に

改ま江戶の東叡山に屬せん本寺は元三大師と安置せ

岡山ハ法慧法印と号久世大和茂源廣之寺領と附

せり

東照大権現宮 山の上は鎮座なり郡宮

昇天山 金龍院 同所西南の方四町餘を隔て同道の左

側の海岸よりあり世俗飛石山とも呼ぶを禪宗に

鎌倉の建長寺に屬せん牛を正觀音座像二尺三寸行基

大士の作りなり 鎌倉志小座蔵菩薩を方崖元圭和尚を以て

岡山と稱 和尚ハ檢校の法嗣なり

飛石 當寺後園の山の麓あり高丈あり廣九尺なり

震動あり平地より地を揺らす

九覽亭跡 山の上あり曲折して登るなり人の備はり

八景小能見堂と号す見るとるなり

泥牛庵 金龍院の前路を隔て向側よりあり 禪宗あり

鎌倉圓覺寺に屬せん本寺ハ七寸計の唐佛の十面觀音の

像と安置此庵の開祖ハ圓覺寺の傳宗庵南山和尚

聖一國師の嗣法なり建武三年中興ハ習甫玄道座原と号す

十月七日寂崇壽寺の開山なり 當菴の南一町半山の工ふ古墳二基あり其一ハ海老名

長門守といふ人の墓なり此人泥牛菴めく自害し

終つひと云い傳つたへるのの時とき世よ事じ實じつとともも惜おぼしかす
猶なほ考かんへへ 後海老名源三季貞

荒井あらい妙法みょうぽう日荷にっか上人じょうにん加持かぢ水みづ 同所どうじよ農家のうけ金子かねこ子氏しよの地のちは存ぞん在ざい

井いと云いその味あじ甘あま美みゆゆくく尤なほ靈泉れいせんととり 此所このじよの小地のせうち名なを

荒井あらいと稱なづせせるるをを往古いやく日荷にっか上人じょうにん荒井あらい平次郎へいじらう光吉みつよしと号とごう

此地このちは居住くぢゆうせせししふふりりかくかく呼よままるるととなり 上人の事

能の仁に寺じ舊跡きよせき 此の米倉の軒屋の地ありとのみ此寺ハ昔

能の仁に寺じ舊跡きよせき 上杉憲房明形院道合の建立ありと云り

鎌倉志古記曰い上杉房州太守築武州金澤能仁寺

創す七しち宇う伽藍がらん請しん方ほう崖がき和尚じやう為な開ひら山やま第一だいいち世よ孫まご山やま曰い福

壽じゆ勝しやう寺じ曰い能の仁に太たい守しゆ有あ旨し隆りゆう能の仁に寺じ位ゐ列れつ諾だく山やま者しや也なり

永えい德とく三さん年ねん小せう未み始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん年ねん三さん月げつ七しち日にち始はじめ東とう暉けい曇どん年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

六浦むつ山やま上かみ行ぎやう寺じ 泥牛でいごう庵あんより六む七しち町ちやう西南しんなんの方道ほうだうより右側みぎがはに

ありあり當寺たうじ往古いやくハ真言しんげんの古刹こせきゆゆくく六浦山むつやま金全寺きんぜんじと号とごう

然しかるる小應安年中せうおうねんちゆう比住持ひぢゆうぢ某日蓮みつにっぜんの法ほふと号とごう日蓮宗にっぜんしゆうとあり

北きた德とく中ちゆう山さんの日祐上人にっすうじょうにん開祖かいそとと自みづから妙法みょうぽう日荷にっか上人じょうにんと号とごう

北きた德とく中ちゆう山さんの日祐上人にっすうじょうにん開祖かいそとと自みづから妙法みょうぽう日荷にっか上人じょうにんと号とごう

祖師堂そしだう 宗祖しゆうそ日蓮にっぜん大士だいしの像ざうを安やすむむ座ざ二尺三寸余にせふさんすんあまあり

日法上人にっぽうじょうにん三十三歳の年さんじゆうさいのねん日常上人にっじやうじょうにんの指圖しゆどより彫造てうぞうせせると云いり

祖師木像胎中そしきざうたいちゆう收藏法華經書しゆじやうほふけいしよ寫入名簿しやうにんなぼ紙しハ為用なほじようの紙しあり

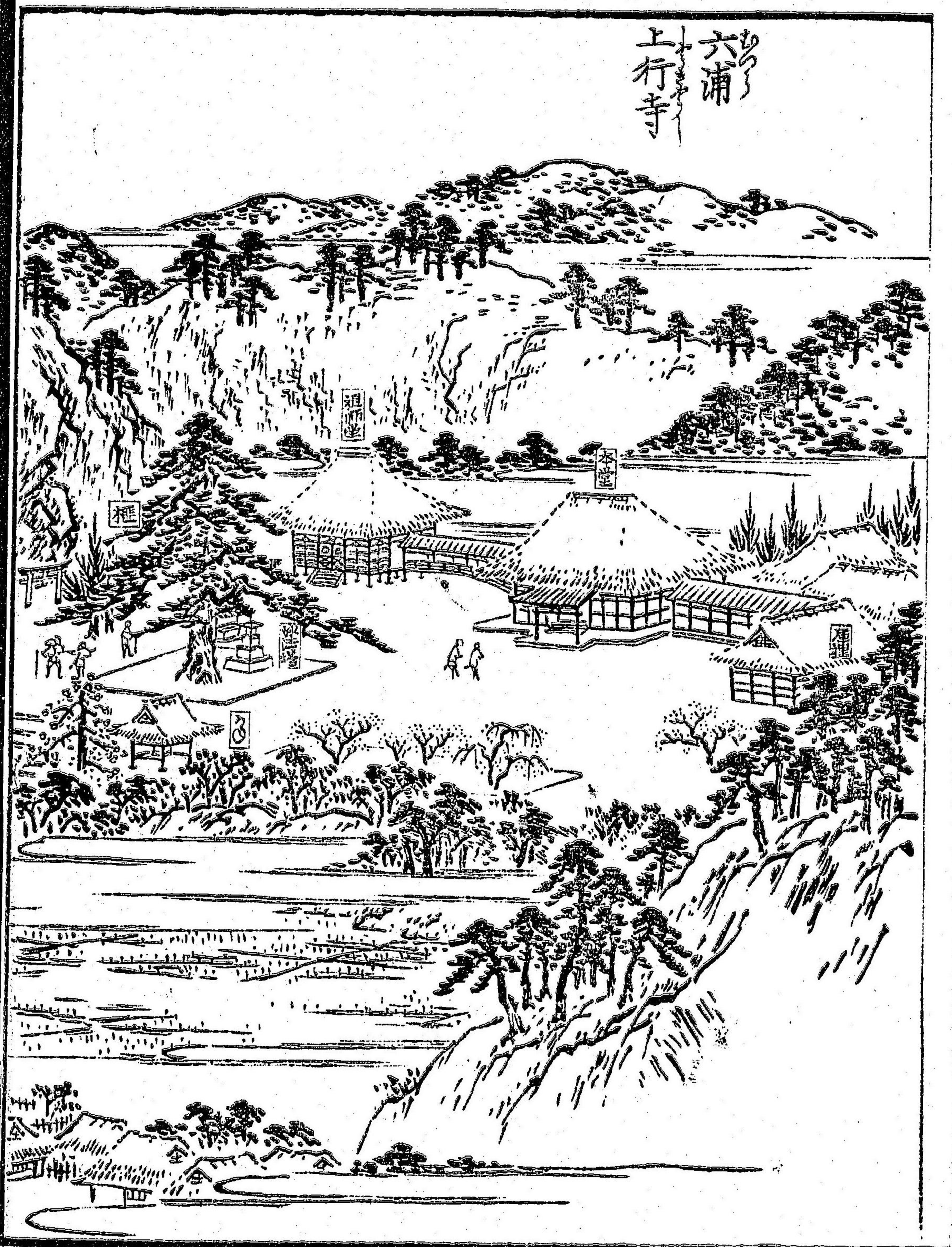
三寸三分さんすんぶんの紙しハ胎中たいちゆうに收いむむ經筒きやうきゆうハ眼がん和鞍わあの製せいのものあり法華經ほふけい

包紫銅ほうしゆどうの經筒きやうきゆうハ胎中たいちゆうに收いむむ經筒きやうきゆうハ眼がん和鞍わあの製せいのものあり法華經ほふけい

能仁寺佛殿梁牌銘 鎌倉建長寺の龍峯庵

恭願皇圖鞏固而四海昇平黎庶安寧而五穀豐稔
檀那前房州太守善薩戒弟子道合敬白在伏冀佛
永運帝運歷永劫而綿延寺門經萬年以昌盛昔
德二年壬戌四月日開山方崖元圭謹題右

六浦
上行寺



八卷小書寫の人名簿一卷共九卷あり其文は云く
御身の御經奉書寫之人

- 一 卷 圓融律師 日源 安立坊の周山
- 二 卷 良範坊 日秀
- 三 卷 正圓坊 日正
- 四 卷 祐莫坊 日傳
- 五 卷 良範坊 日秀
- 六 卷 衆賢阿 兩日人
- 七 卷 衆賢阿 兩日人
- 八 卷 理賢坊 日宣

奉 右願主 卿公沙門 妙法親父母

奉 讀誦妙法蓮華經五部 上良範公 正圓同心久讚

奉 方便品 壽量品 自陀羅尼品
各賢祀宛讀誦之

奉 讚誦 十如是 自我謁 題目百廿五

奉 唱題目一萬反 日源敬白

御身ノ形相中老日法上人御作也

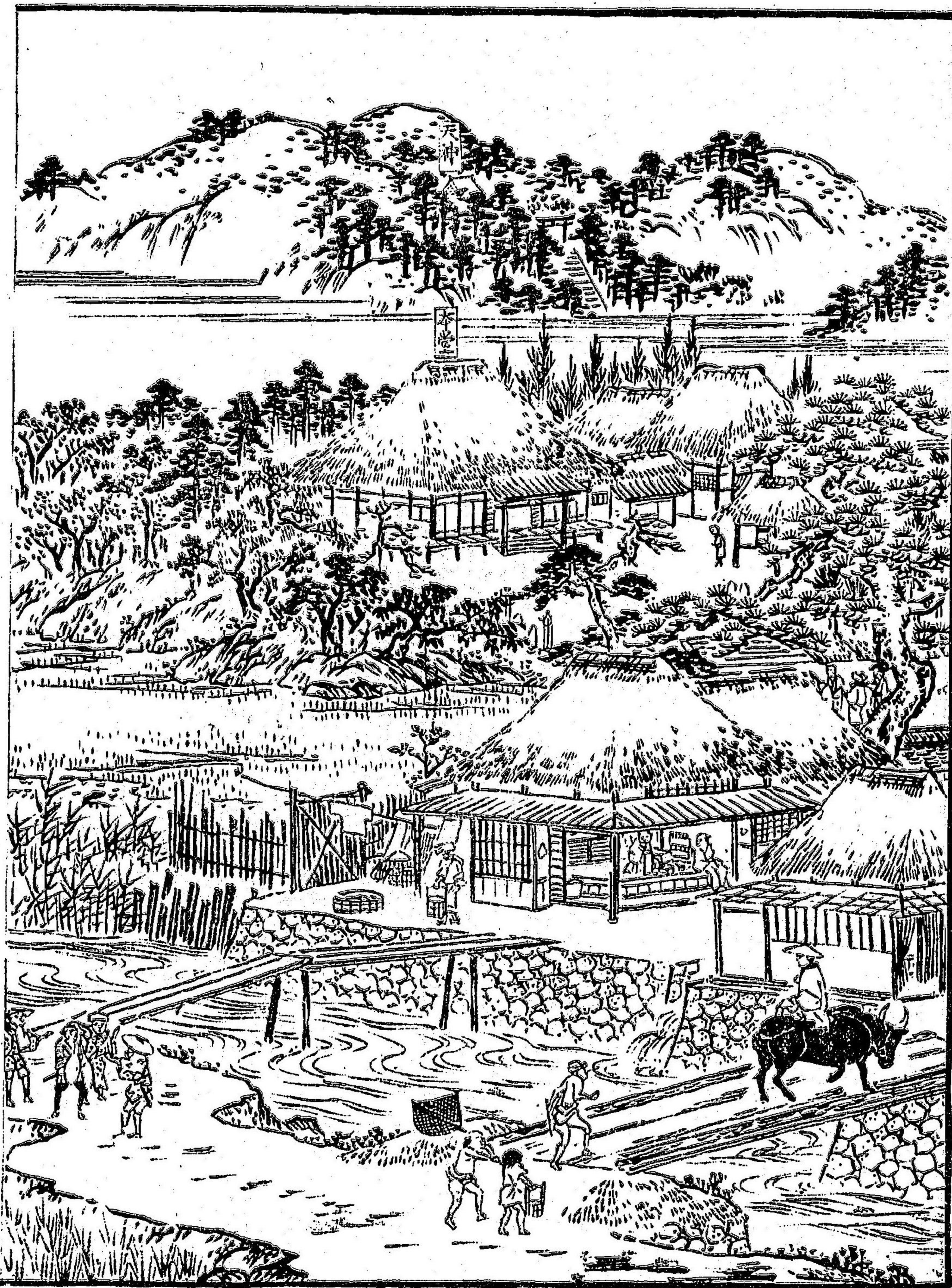
應 永十三年丙戌十月十三日

右六萬恒沙上首上行善薩此御利益者尔佳迹用本
名四字初隨有喜形相身任御附屬妙法之要五字弘一
天四海秘法良藥施萬人明廣爰流布因撰純就信
心大施主等之成就所嚴迷者也

釋迦堂 本尊釋迦多寶四菩薩 眞言宗

六浦妙法日荷上人石塔 祖師堂と釋迦堂との間櫃の本にあり

上下とも後人造り添へたるものとあり
十三日と彫りあり妙法蓮華經の當寺の大檀那中
妙法蓮華經の當寺の大檀那中
此の妙法蓮華經の當寺の大檀那中
上人の遺徳を繼承し得度のは妙法蓮華經の當寺の大檀那中
上人の遺徳を繼承し得度のは妙法蓮華經の當寺の大檀那中
上人の遺徳を繼承し得度のは妙法蓮華經の當寺の大檀那中



たうーと生捕く六面の沖に沈むをうけりきとありて興あり
永祿の頃ハ小田原北条此地を領一六浦木曾分の地ハ
武田家へ付一同所大道分の地を龍源軒とて付
たる由分限帳より云々

澤庵和尚鎌倉記行

あられハ三ヶ鐘舎へ移る一塔を築けり
野ありてあむむはの海をこへ
こゝに海老のみまればあそびやん

よのぼる六浦の海人のまらけハ海のまき干沼

海士のまきハあつと云々

六浦川 此地の道を横きりて流る小溝を云又此溝は架す

小橋を六浦橋と号くと云

日光寺の辺り光傳寺の辺の地の字を川村と称し按ふ昔の水流の
田記なるたふかくをいなりん秋

日光山専光寺 嶺松寺より二町計を隔て南の方道あり

右側はあを浄土宗ゆり同所天然寺は属を本尊十一

面観音ハ立像一尺計あり佛工春日の作なりと云相傳ふ

照天姫の念持佛ゆり姫松葉ゆり燻らゆり時身代

里小立ゆりふと云傳へり寺の後の方は日光権現の宮あり

故小山号と云

油堤 同一寺の後の田圃を隔て半町あり西の方小續き

と山を油堤と云由土人云里 鎌倉志ゆり傳光寺の 里諺に

照天姫の乳母侍従と云るもの姫の粧具を携へ此所迄

尋求しゆりゆり姫の形方あそびと云るを歎き悲しむ被粧

具を捨て終ふ此所の川へ身を沈めり故に号とす

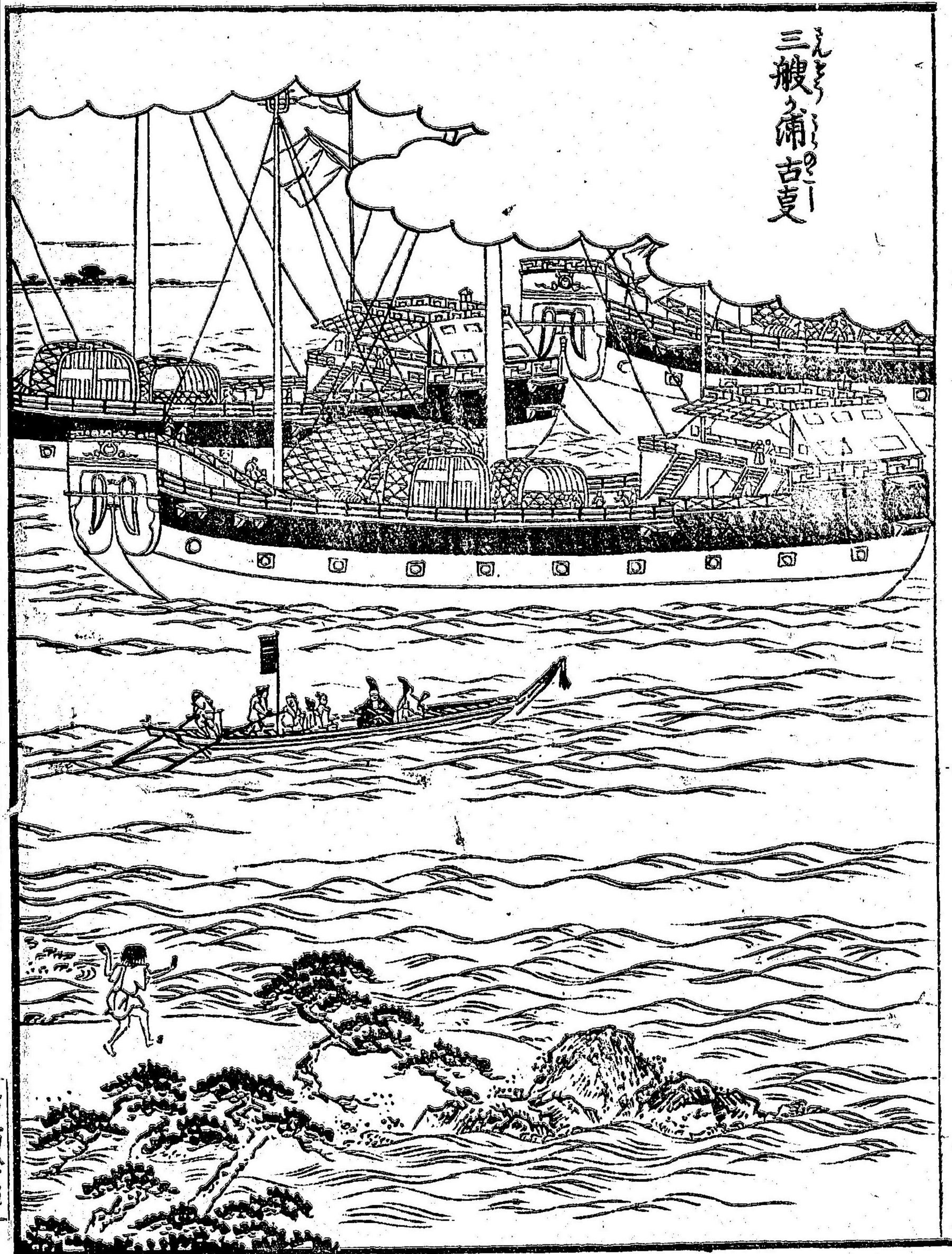
と云り

侍後川 川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の



真訣地藏

下流より水源も鎌倉より發し未ハ三艘村より塩濱へ
 如く海灣を會し瀬戸街道へ横より架を橋と侍従
 橋と号名義ハ油堤の茶下よ云々此橋を渡りて右の
 道ハ武蔵相模の國境地蔵の辻へ如く鎌倉へ往還の道
 ナリ南行の道ハ三浦三崎への通路なり左の川傍の道ハ
 三艘浦又相州境浦郷等への道なり
 常見山光傳寺 同所北の端道より右側侍従川に傍り
 あり浄土宗あり鎌倉光明寺に屬せり阿彌陀
 如来の本像を立像中より四尺許あり作者あり
 開山ハ得蓮社忍譽靈傳上人と号門の内右の方
 地蔵堂あり本尊地蔵菩薩ハ立像六尺許あり
 運慶の作ありと云地福山蔵光寺と号
 界地藏 土俗鼻訣地藏と称し光傳寺より九丁あり



西の方鎌倉道の傍にあはる巨巖の壁立したる所は
此の像を鑄出せしと此の像の鼻缺損を此所の武蔵相摸の

三艘浦 六浦の南向三艘村にあはる永祿九年の春唐船

三艘此浦より着岸せし故に名付くとも鎌倉志云其時
舟を載来り一切経及び青磁の香爐花瓶等も皆

称名寺に傳へりありと云

海蔵山太寧寺 三艘浦の東瀬崎村にあはる 界地藏あり 往古ハ

布金の道場中より薬師寺と号し真言宗なり一蒲
御曹司源範頼公生害あり後其法号を採り太寧寺

と号し千光國師閑山とあり禪林に轉し鎌倉建長
寺の属寺とす薬師寺の号の廢せんとて敷き寺前村の地へ
薬王寺を開創し前の薬王寺の下に詳なり
本寺薬師如来立像丈五尺あり十二神將の像ハ三尺あり

あり共運慶の作鎌倉志に當寺勸進帳を多く

云往古 伏見帝永仁年間此村に貧女あり父母の忌

日は當りしにも佛に供養しすまらき便かり絲を繰

卷子とて賣り佛餉に備へたと云然れとも

容易に買人なり或時童子一人来り是を買ひ價を

以て父母の忌日に供養の料に充ちて佛前に至る小

件の金を多くあり依り知ぬ如来貧女の純孝の志を

感して自介以来へを薬師と云とあり此故は今も此薬師
佛へ病願の祈りあり

時其祈願成就の報をと云堂中は置け其御面大寧寺殿道悟大禪
建久四癸丑年八月と

蒲冠者 範頼靈牌

範頼墓 本堂の後の山麓にあり高は二尺六七寸あり

又頼朝は申し伊豆に越是時父子三人五百餘騎ゆく修善寺に押寄

題 太寧寺六首

寺樓一抹晚江煙

朝送鐘聲落釣船

殘曉香消拍子煙

一老來無夢越漁船

六浦遙連三浦煙

越風隨岸幾移船

山街夕日水籠煙

雪後蘆花月滿船

衲衣懶惹柳爐煙

幾人能得一菴眠

功名盖世畫交煙

失墜危於灩澦船

當寺書院ハ北向ハ瀨戶ノ入海ヲ眼下臨ク風光殊小

勝れキ寺寶ハ範頼ノ自筆ハ古奇ノ懸幅ハ及ヒ陣中ノ用

菅根ハ推現社ハ瀨崎ノ東室ハ本村ニあり又民家ノ間ハ犬樟ノ

老樹あり

雀浦ノ同所ノ南北出崎ヲ菅神ノ小祠アリ故ハ土人ノ

天神崎トモ稱ス此地ノ海灣ト浦ノ江ト云

中着巖ハ同所ノ絶壁ノ下ニあり大二間ハ四方ニ盤石アリ潮ノ尽

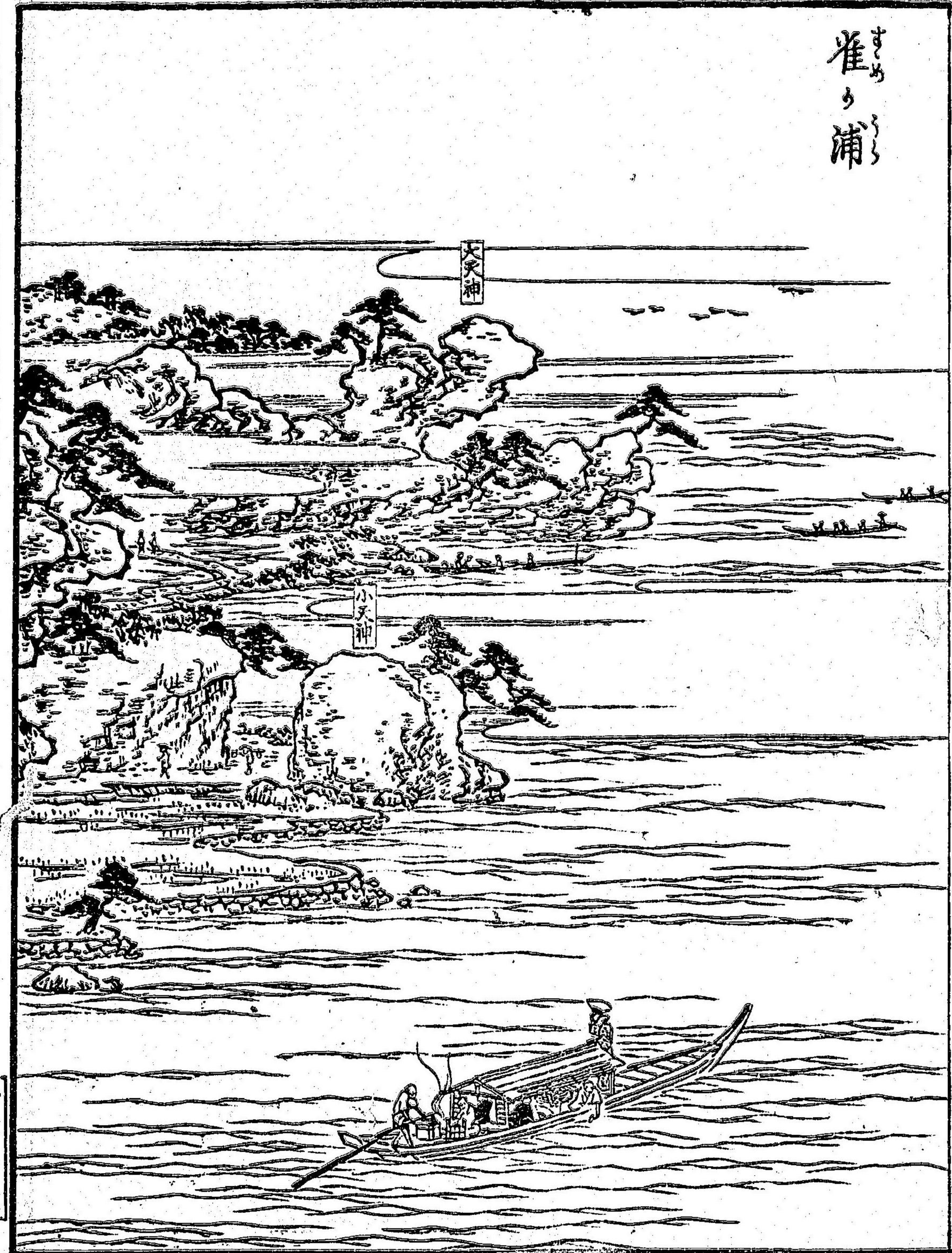
根附ハ巖ニあり同所百歩ト隔ル西南ノ方ニ崖下ありと云

田園雜記

浦川ノ湊トいフ浦ノ湊トいフ浦ノ湊トいフ浦ノ湊トいフ

道與 准后

すめ
の
浦



鳥帽子島 同所東の出崎の小島と云ふ形状鳥帽子に似
たる故小名と有り

鎌倉記行 多原一海といふ名と云ふ

夏島 同所東にあり長三町餘を横一丁計の小島なりと

里人云く玄冬の雪と云ふ積りなりといふ

鎌倉記行 多原一海といふ名と云ふ

二多ふと降白雲したる如く海邊の草一消えん 澤庵

猿島 夏島の東南にあり五丁四方を占むあり

裸島 同所二三町を占む離れたる小島なりと

按は澤庵和尚の鎌倉記行に笠島と云ふ名を挙ぐる云々
かゝる如く昔と云ふの夕時ぬる如く人ありと
かくあれといはれは笠島と云ふ名とあり云々猿島裸島二島の
中と云ふは、かゝる如くかゝる如くありと云ふ

甲香 此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲

香ハ螺貝の様なり小くく口の程比細長めく出たる

貝の蓋なり武蔵國金澤と云浦にありと所前者ハ

る家と云ふとまうしはくもいふとあり野槌小今金澤

めく尋むべきといふは細と云ふなり

